

| | |
|-----|-----------|
| 1 | 1 |
| 学 図 | 小 国 5 2 2 |

文 部 省 検 定 済 教 科 書

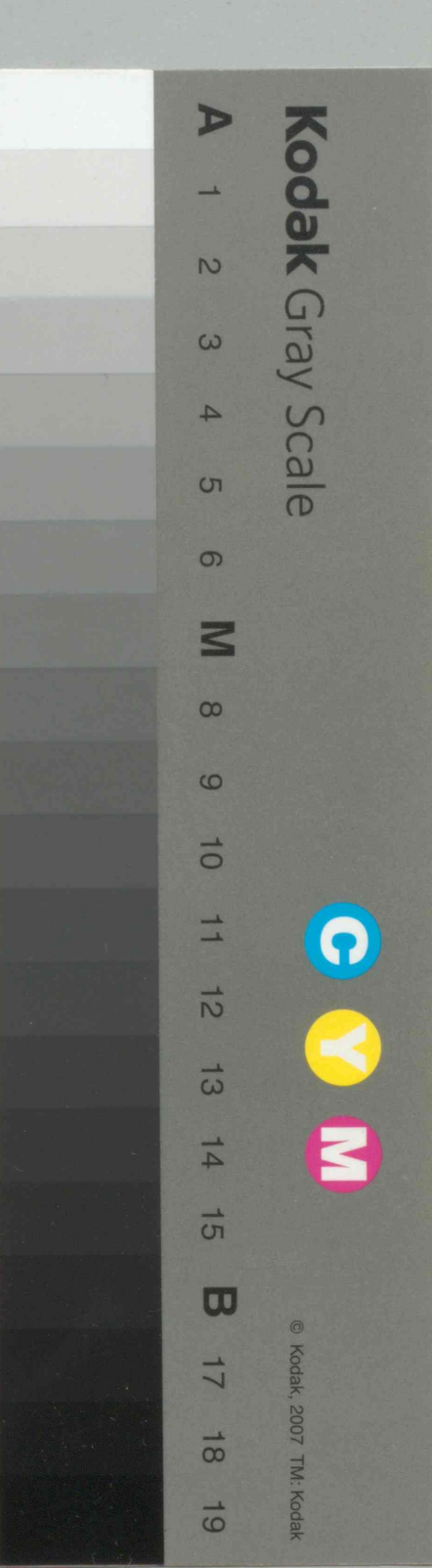
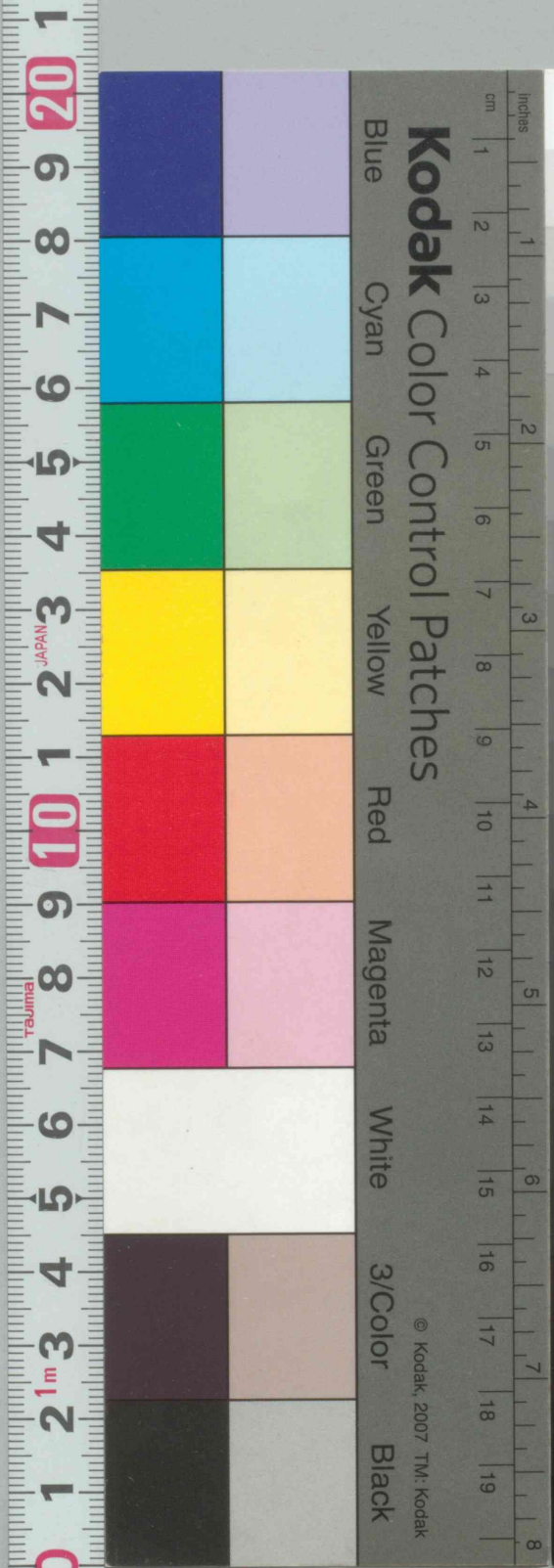
財 団 法 人 教 育 図 書 研 究 会 編 修

教育図書
資料室

五年生の 国 語 中



学校図書株式会社発行



60327

教科書文庫

| |
|----------------|
| 6 |
| 810 |
| 34-1950 |
| 01304 49747 |



寄 贈

| |
|------------|
| 教科書文庫 |
| 6 |
| 810 |
| 34-1950 |
| 0130449747 |

昭和二十五年

月

日 文 部 省 検 定 済 小 学 校 国 語 科 用

中央図書館

五 年 生 の 国 語 中

広島大学図書

0130449747



学校図書株式会社

広島大学
教育学部図書

広島大学図書

0130449747



もくろく

一 秋のおとずれ

秋の日ざし……………五

ほうせん花の実……………六

きびの葉をわたる風……………七

たんぼ道……………八

二 わたしたちの尊敬する人

民主主義の父……………十一

はえをにがしてやる……………二十

走る人間機械……………二十四

ありのままにえがく……………三十七

三 子供の家

子供の家……………四十三

子供会……………四十六

四 北の国・南の国

秋から冬へ……………七十二

東北からのたより(手紙一)……………七十六

東京からのたより(手紙二)……………八十二

五 冬晴れ

冬の子供……………九十

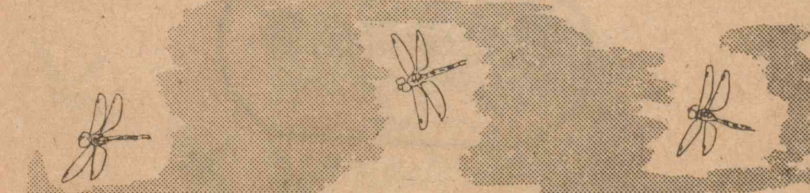
北風のふえ……………九十二

冬のスケッチ……………九十三

六 ひざくりげ

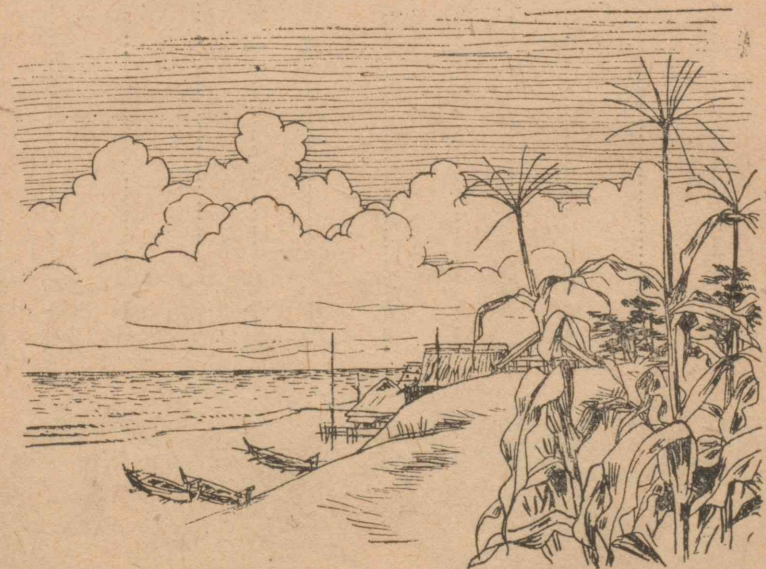
ことばの表……………百二十

漢字の表……………百二十八



一 秋のおとずれ

夏休みも終った
暑い日の 思い出の
はま辺の村の小道には
高いもろこしの葉が
ざわざわしている
ああ どこやら秋らしい
海の風
まつ林の上の白い雲よ
あれ始めた青い海よ
もう きみらとおわかれだ



秋の日ざし

大根のふたばに秋の日ざしかな
けいとうのみなたおれたる野分かな
とんぼのさらさら流れとどまらず
かい道をきらきらと飛ぶばったかな
ひとまわりして稲すずめくずれけり

ほうせん花の実

ほうせん花こき秋の日におのずから
わるる実のふと音するひびき

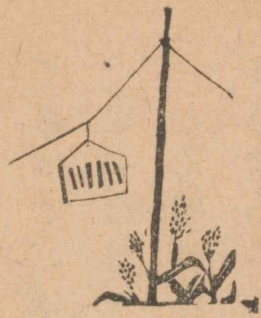


秋の野に豆ひくあとにひきのこるはぐさが中の
こおろぎの声

手ふるれば夕日にひかる木のみきも秋のはだえ
のつめたかりけり

この日ごろとみに秋づけり朝ごとにとるいちじ
くの数のへりつつ

山空をひとすじにゆく大わしのつばさのはりの
すみもすみたる



きびの葉をわたる風

昼の日ざかりは、さすがにまだきびしい残
暑の陽光が地上にてりつけているけれど、朝夕のすず
しき、ことに、夜ふけからあかつきごろの、身にしみ
るような冷気は、なんととっても秋だ。夜ごとに天の
川のながれが白くなりまさり、夕風にさざら波立つ海
の色が、思いなしか、こく深くなった。うらの畑のき
びの葉をわたる風も、まるで、かれ葉でもふくように
からからと鳴っている。



たんぼ道

一みのりかけた稲田のまわりには、豆もさやをたれていた。稲の中にはすでに下葉の黄色くなつたものもあつた。九月も半ばすぎた。稲ほはいろいろで、あるものはすすきのほの色に見え、あるものはまったく草の色、あるものはあかげのふさをたれたようであるが、その中でこいちやかっ色のがもち米を作つた田であることは、わたしにも見わけがつく。

朝日は谷々へさしてきた。

たんぼ道の草つゆは足をぬらしてかゆい。わたしはその間を歩きまわつて、こおろぎの鳴くのを聞いた。

○たいていの物ごとは、いいかげんに見ていると、なんのおもしろみもなく、感じることも考えることもありません。

その反対に、なんでもないような物ごども、気をつけて観察してみると、今まで気づかなかつたおもしろいこと、ふしぎなことを発見したり、それについて考えたり感じたりすることが多いものです。夏から秋にうつり変わるようすを細かに観察し、そこに詩の世界をさぐりましょう。

○俳句にしても、短歌にしても、自由詩にしても、観察してすなおに感じとつたこと、または心に思つたことをすらすらどうたうものです。ことばにとらわれないで、本当に見たこと、感じたこと、思つたことを、自然な調子で歌に作つてごらん下さい。

二 わたしたちの尊敬する人

だれでも、すぐれた人、りっぱな人になりたいと思わない人はないでしょう。

「少年よ大志を持て。」

と、クラーク先生は少年たちをさとされました。えらい人、すぐれた人、自分が心から尊敬している人の伝記を読もう。そうして大きな志を持とう。明かるく、強く、正しく、どんなにつらいこと、苦しいことがあっても、くじけてはなりません。

大政治家のリンカーン、大科学者のニュートン、スポーツマンのヌルミ、画家の円山応挙は、少年少女の手本となり、心の太陽となって光と希望をあたえてくれる人々です。

民主主義の父

「民主主義の父」と世界の人人からたたえられているアブラハム・リンカーンは、アメリカ合衆国第十六代の大統領をした人です。

リンカーンは、一八〇九年、ケンタッキー州のいなかに生まれました。おとうさんの名はトーマス、

おかあさんはナンシーといいました。

(一)

リンカーンのおとうさんは大工さんで、



毎日せつせと働いたのですが、どうしてもびんぼうからぬけることができませんでした。そのために、リンカーンはいろいろと苦勞しました。七才の時に、一家はインデアナ州にうつることになりました。

「こんど行く所はいい所だぞ。」

と、おとうさんにはげまされて、わずかな荷物を車に積んで、住みなれた土地をあとにして、インデアナ州に向かいました。寒い風がふきあれ、道はなかなかほかどりません。数日もかかって、ようやく目ざす土地へ着くことができましたが、そこは人も住んでいないようなあれ地でした。

おとうさんは木を切つて来て、いつしうけんめい家を建て始めました。リンカーンは手足をきずだらけにして手つだい、

やつと、一けんの小屋をつくりました。それはそまつな山小屋で、まるで三方を囲い、出入口の方はあけはなしで、まどもゆかもなく、屋根は木の皮をつけただけであり、ねどこさえなく、落葉をしいて、その中へねむるといったしまつてした。そうして、草や木のおいしげったあたりの土地をきりひらいて畑を作り、農業を始めました。

リンカーンは、毎日毎日朝早くから夜おそくまで、おとうさんやおかあさんとともに畑を耕したり、たねをまきつけたり、草を取ったり、とり入れをしたり、かいがいしく働いておりました。このような開たく生活ですから、食べ物も十分になく、時にはじゃがいもばかりを食べていなくてはならない時があり、雨風がひどく、ねむることのできない夜もありました。いつも

やさしくはげましてくれたおかあさんは、とうとうつかれのところへひどいマラリヤ熱にかかってなくなってしまうました。

リンカーンは、おかあさんのお墓の前にひざまずいて、

「おかあさん、しつかり勉強して、かならずりっぱな人になります。」

と、かたくちかいました。

(二)

リンカーンは、勉強しようと思っても家によい本がなく、今のようにラジオもありませんし、開たく地の不便なところでしたから、新聞も届きませんので、世の中のできごとはさっぱりわかりません。ただ、通りがかりの旅人から、めずらしい話を聞いて喜ぶくらいのことでした。こうしたところにくらしてい

ても、リンカーンの勉強心は非常に強く、どうかして学校に行つて勉強したいと思ひ、何度もおとうさんをお願いしました。

おとうさんは家のくらしにこまっている時でしたが、その熱心さに動かされて、学校に入学させました。リンカーンの喜びはひととおりではありません。数キロメートルもはなれた遠い学校でしたので、朝は暗いうちに家を出て、飛ぶようにして学校に通いました。

ある日のこと、学校のげんかんにかけてあつたおじかの角がこわされていました。先生は、生徒を集めて、

「おじかの角をこわしたのはだれか、申し出なさい。」

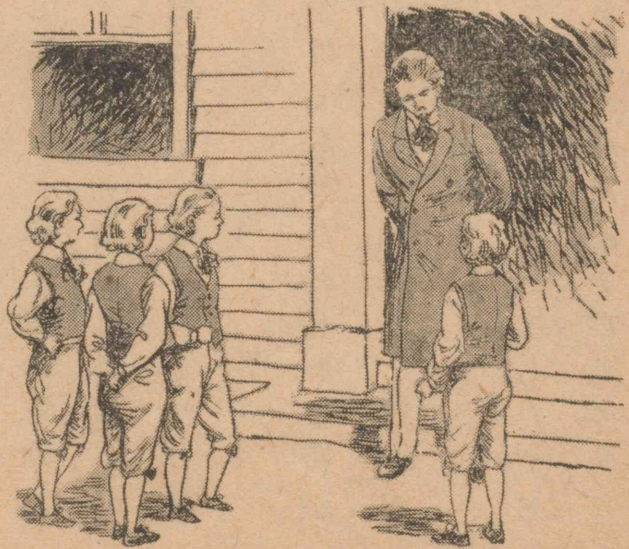
と、おっしゃいましたが、だれも「わたしがこわしました。」と言つて出る者はありません。先生の声はだんだんきびしく、

「だれかこの中にいるはずですよ。と見まわされました。その時、リンカーンは、つかつかと先生の前へ進みでて、

「先生、わたくしがこわしたのです。申しわけありません。」

と言って、頭をさげました。友だちのあやまちをかばおうとしたのです。

「本当か。おまえはうそを言って、本当にこわした者にかわろうとしているのではないかね。感心な心がけだが、先生をいつわつてまでかばうことはよくないことです。」



と、先生はやさしくさどしました。リンカーンがこわしたのではないと思っただけです。リンカーンはじつと下を向いていました。しかし、友だちのあやまちは自分のあやまちと同じことだと考えました。

「先生、お許しください。」

「よろしい。よろしい。おまえの心がけにめんじて、本当にこわした者も許してあげよう。」

とおっしゃったので、それまで、びくびくしていた少年たちは、ほっと安心しました。それからリンカーンは、学校中の友だちから重んぜられるようになりました。

(三)

しかし、せつかく入学した学校も、リンカーンが学校に通っ

ていたのでは家のくらしがたたず、一年ばかりでやめなくてはならなくなりました。それからまた毎日父の手つたいをしたり、人にやとわれたりして働きました。こうして学校をやめ、あせみどろになって働きながら、火のように燃えあがつたリンカーンの勉強心はますます強く、あちらこちらからいろいろな本を借りてきて勉強を続けました。イソップ物語や、ロビンソン・クルーソーやアメリカ合衆国の歴史の本なども読みました。ある時、近所の人からワシントン伝を借りました。リンカーンは非常に尊敬していたので、ひまさえあれば、この本を読んでおりました。ある夜のこと、本をまくらもとにおいてねていると、夜中に大雨がふってきました。リンカーンが雨の音に目をさまして起きあがって見ますと、かべのすき間から雨がしみ

こんできて、あたりはびっしよりとぬれており、借りてきたワシントン伝もすっかりぬれてしまっていました。リンカーンはこれはこまったことになったと、心配のあまり夜の明けるまでねむれませんでした。

夜がしらじらと明けると、リンカーンはぬれてしまった本をかかえて、貸してくれた人のところへ行き、わけを話してあまりまりました。そうして、三日間畑の草とりをしてべんしよりの代わりをしました。

その人はたいへん感心して、ワシントン伝をリンカーンにやりました。リンカーンはその本をていねいにかわかし、それから何度も読みかえしたということです。



その後、いろいろな苦しいことにうちかかって、勉強を続け、
弁護士試験に通り、イリノイ州の州会議員にも選ばれました。
そして、ついには、第十六代のアメリカ合衆国の大統領にな
り、あの有名などれい解放を実現し、人類の歴史にかがやかし
い一ページをかざったのでした。

はえをにがしてやる



りんごの實の落ちたことから、万有引力という近代科学のき
そとなった法則を発見したのはニュートンです。このようなむ
ずかしい法則を発見した学者ですから、さぞ氣むずかしい人だ
ろうと思うでしょうが、それは大ちがいです。この大科学者は

いたって氣のやさしい、ゆったりした人でした。それは少年の
時からそうだったのです。こんな話が残っています。

お昼のかねがなって、もうお友だちはみんなおべんどうを食
べてしまったのに、ニュートンはつくえにかじりつくようにし
て、いっしょうけんめい算数の難問題を解いていました。ニュ
ートンは学校の成績はあまりよくなかったのですが、算数だけ
は非常にすきで、よくできたそうです。ニュートンがむちゅう
になつて問題を考えているのを見て、お友だちのちやめたちは、
ニュートンをからかうつもりで、ニュートンのべんどうをそつ
と取り出して残らず食べて、外側だけまたもとの通りにしてお
きました。

そんなことを少しも知らないニュートンは、問題を解き終る

とほつとした気持ちになって、急いでべんどうを取り出しました。そしてつつみをひらいて食べようとすると、中はからっぽです。その時ニュートンはなんと叫んだかと思ひます。きまりわるそうにひとりごとを言いました。

「なあんだ、ぼく、もうさつき食べちゃったんだっけ。」

一つの事に熱中するニュートンは、人をうたぐるなんてちっぽけなりようけんはみじんもありません。それだからこそ宇宙の深い真理も発見できたのでしよう。万有引力の法則の発見ばかりでなく、数学界に大革命をあたえた微分、積分という高等数学を考え出したのもやはりこのニュートンです。

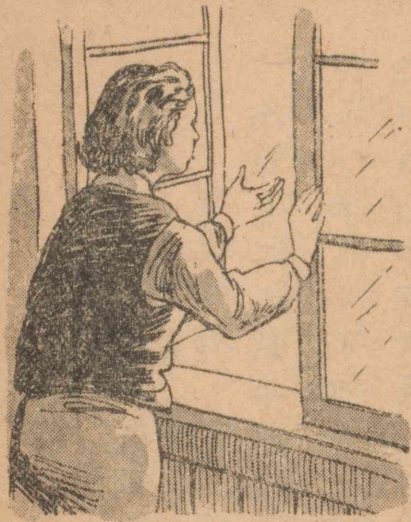
またこんな話があります。万有引力の法則を研究中の時のことかと思いますが、何億、何ちようというような、大きな数字

を使って計算をしている時、一びきのはえがひよいと飛びこんで来ました。そしてニュートンのまわりをうるさく飛びまわって、計算のじゃまをして仕方がありません。さすがのニュートンもこれにはがまんできなくなつて、とうとうそのはえをぱつと両手でつかまえました。しかしそのはえを殺すようなことはしないで、そつと手の中へ入れたまま、まどぎわへ行くと、

「じゃまをしないでおくれ。いま、計算をしているんだから。」

「ね、世界はぼくたちふたりには広すぎるくらい広いじゃないか。」

「そう言つて、はえをまどの外へ放してやりました。」



走る人間機械

今から二十数年前のこと、あまり速いので「走る人間機械」といわれていたヌルミ君は、一九二四年パリに開かれた第八回オリンピック大会で、千五百メートル、五千メートル、一万メートルだんこう競走、三千メートル団体競走の四種目に参加し、予選を加えて六日間に七度スタートして七度一着となり、四種目に金メダルを手にした人です。あまりすばらしい走者なので、そのころの新聞ではヌルミ君を「走る人間機械」といってほめたたえました。

ヌルミ君はフィンランドの人で、パリのオリンピック大会に

参加した時にはもう二十七才ということでした。身長一・七六メートル、体重六六キログラム、外国人としては大きな方ではありませんが、がっしりしたかた、ぶあついむね、しかのようになすらりとしたあし、美しくつりあいのとれたたくましいからだを持っていました。おく深い光をたたえながらも、どこか親しみのあるまなざしは、高くひいでたほおぼねや、ひきしまつたあごとともに、どんな苦しい練習や競走にも負けない強い精神力を示し、また、その表情の中には、一流選手にありがちな少し神経質なするどさも見られました。

「走る人間機械」といわれたヌルミ君は、パリのオリンピックの大会で、どんな競走をしたのでしうか。

(一) ヌルミ君の競走ぶり

パリのオリンピック大会は、一九二四年七月六日から十三日まで、パリのこう外、セーヌ河のほとり、コロンブの大競技場を中心として開かれました。参加国四十五、これに出場する選手はおよそ千五百人。日本も陸上、水泳、テニス、レスリング（外国すも）と四つの種目に参加しましたが、北の国フィンランドの選手たちも加わり、その中にヌルミ君がいたのです。

コロンブの競技場は一まわり五百メートルですから、一まわり四百メートルの神宮競技場のトラック（走路）よりは百メートル長いのです。競争は世界の名ある選手が集まっているのですから、はげしいものでした。

ヌルミ君はオリンピック大会五日目（七月十日）に行われた千五百メートルの決勝に、予選に勝ち残った十二人の選手と共にスタートしました。いづれもおとらぬ一流の選手のことゆえ、スタートしてしばらくはだれが先頭かわかりませんが、一まわりすると先頭に出たのはヌルミ君でした。他の選手たちはたいていつま先からふみつけるのに、ヌルミ君はかかどからふみ、からだをまっすぐに立てた特別の走り方で大またです。ヌルミ君のしつかりした速い走り方にはだれもこれに続く者はなく、二着とおよそ二十メートルの差をつけてテープを切ったのです。この時のタイム三分五三秒六は、この年の六月、自分のつくった世界記録三分五二秒六には、わずかにおよばなかったが、今までの記録を四秒も破ったりつばなオリンピック記録

でした。この競走でヌルミ君は手にストップウォッチを持って走りました。そして一まわりごとに時計を見ては走るのです。わけを知らないスタンドの人々は、ヌルミ君は人を相手にしないで、時計と走っているのだとうわさしたのでありますが、本当は五百メートルのトラックになれなかったために、とちゅうの調子がわからなかったから時計を見て走ったということです。この競走のタイムは、自分の持つ世界記録にわずか一秒足りなかつたが、これは、このあと間もなく始まる五千メートルの決勝のために、力を残したものと思われまゝ。

この競走の一時間後には、五千メートルの決勝が始まりました。フィンランドには、どうしたことが、千五百メートル以上の長い競走に、強い選手が多いのです。だからこの競走には、

十二人のうち四人までがフィンランドの選手でした。中でもリトラ選手はヌルミ君におとらない走者であり、このほかにも、有名なスエーデンのビダ、アメリカのロミツグ、イギリスのクリボン、フランスのドルキースなどがおりました。

三まわり目になると、ビダ、リトラ、ヌルミの順となり、他の選手はおよそ二十メートルほどおくれました。三人は一列にならんで、機械のように正しいリズムで走っています。七まわり目になると、ヌルミ君は先頭になりました。あと三まわりです。最後の一まわり、リトラ君がヌルミ君とかたすれすれにならびました。大接戦です。あと二百メートル、火の出るようなはげしい競走です。ヌルミ君が少し先になりましたので、リトラ君も必死で追います。ゴールに近づきます。とうとうヌルミ

君がむねのはばだけの差で勝ちました。

このようなはげしい競走に、何万という人々は立ち上がっての大き過ぎです。タイム一四分三一秒二は、今までの記録を五秒も破ったオリンピック新記録であります。競走を終ったヌルミ君は、さすがにつかれたと見え、リトラ選手とともに、場内のしばふの上でしばらく休みました。やがてセーターをかたにかけ、手にランニングぐつを下げ、引き上げる、この英雄にあびせかけるはく手と歓声は、場内にみなぎりしましたが、ヌルミ君のほこりげもなく、静かに帰るようすは、何かさとりきった人のように思われるのでした。

それから一日おいて、七月十二日午後三時に、「コロンプの太陽戦」とよばれた一万メートルだんこう競走が行われたのです。

だんこう競走というのは平らなトラックを走るのではなく、野原や丘や林の中などをぬっての競走です。ですから、とちゆうにさくがあったり、小川があるかもしれません。なかなかほねのおれる競走です。この競走で、ヌルミ君は、ただ速いだけでなく、底知れない強いからだを持っていることを示し、世界中の人々をあつといわせました。

パリは、この日たいへん暑く、気温は急に上がり、外では三十七度以上になり、屋根の下のスタンドでも三十五度で、あせをふきふき見ていたのです。場内のスピーカーはしきりに選手たちが、暑さに苦しい競走を続けているようすを知らせています。スタンドの人々も心配そうに、選手のはいつて来る門の方を見つめておりました。

この時、門にすがたをあらわしたのはヌルミ君でした。あせにまみれた足を一歩一歩ふみしめ、しせいをくずすこともなく、ゴールをめざして進んでいきます。ヌルミ君は、スタンドからのあらしのようなはく手にむかえられながら、ゴールにはいりました。人々はそのじょうぶな体力に、ただ、かんたんするばかりでした。続いてスペインの選手がはいって来ましたが、走る方向をまちがえたので役員が注意すると、その場をぐるぐるとまわってたおれてしまいました。フランスのふたりの選手は、ゴール近くで目が見えな



くなり、手さぐりて歩くのでしたが、とうとうゴールのすぐ手前でたおれてしまいました。スタンドの人々は、もうこのありさまを見るにしのびず、顔をおおうてなく入さえありました。このほか、ここまで帰れずにとちゅうで中止した選手、たおれた選手も多く、出発したのは三十九人でしたが、ゴールまでもどって来たのは、わずか十五人です。オリンピック委員会では、「コロンブの太陽戦」とよばれたこの競走にびっくりして、これをつぎの大会からやめることにしました。ヌルミ君のタイム、三二分五四秒八はりっぱな記録であり、二着は五千メートルにヌルミ君と熱戦した同じフィンランドのリトラ選手で、約二分ほどおくれてゴールにはいりました。

こんな苦しい競走をしたよく日の午後五時、ヌルミ君はもう

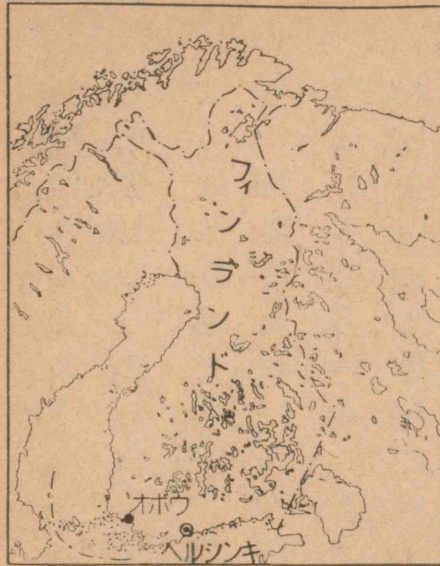
昨日のつかれもわすれたように、三千メートル団体競走にリトラ、カツ両選手とともにスタートしたのです。これはトラックを六まわりする競走です。この競走でもヌルミ君は八分三二秒で一着となり、二着のリトラ、十三着のカツ選手と団体でも一等になりました。

ヌルミ君はこのような苦しい競走に、世界中の選手を相手にまわし、いつもどうと一着になり、金メダルを四つも手にしました。もしも、競走の組合せがヌルミ君につごうよく、八百メートルか一万メートルに参加できたならば、きつとあと一つぐらいは手に入れたらうと、だれもが思いました。ヌルミ君は今までにないすばらしい成績をのこしたのです。おそらく、このような英雄はふたたびあらわれないでしょう。「走る人間機械」といわれたのも当然だと思えます。

(二) ヌルミ君の練習

一九二〇年、ベルギーのアントワープに開かれた第七回オリンピック大会にも、ヌルミ君は五千メートルに二着、一万メートルに一着の成績をあげ、「世界中から注目されました。」

フィンランドは南にバルチック海をひかえ、東はソビエト、西はスエーデンとさかいを接している、南北に細長い小さな国です。ヌルミ君は、フィンランドの都ヘルシンキから西北へ三百マイルほどはなれた、オボウという



港町に住んでおり、へいぜいは、この町の山の手にある競技場で練習してました。無口で、聞かれたことだけしか話さないような人がらですが、友情にあつく、親しみやすい人だそうです。岡部平太という人がオボウをたずねて又ルミ君にあい、「練習はおもしろいか。」ときくと、「長きよりの練習はだれだつておもしろいとは思わない。自分はいつでもひとり練習している。雪の中で走っているとねむくなることがある。本当にねむってしまったこともあるのだ。けれども競走は、自分にとつていちばん楽しいものである。」とぼつりぼつり答えたそうです。

なるほどフィンランドは日本に比べると、北海道よりもはるかに北、カラフトの北部と同じようなところにあります。だから雪のふる冬が長く、日本のようにめぐまれたよい気候ではありません。こういう国に生まれても又ルミ君のようなおどろくべき選手が出るのです。これにはいろいろのわけがあるでしょうが、長い間がまんづよく、そして規則正しく練習したたまものであると思います。

フィンランドでは、このえらい大選手のめいよを永久に記念するために、ヘルシンキに又ルミ君の走っているすがたの銅像をたてました。

ありのままにえがく

江戸時代の名高い画家のひとりに、田山応挙という人があります。たんばの国（今の京都府）の農家に生まれ、子供の時か

ら絵をかくことはたいへんすきでした。十七才の時に、京都へ出て狩野派の絵をいっしょうけんめいに勉強し、のちに写生を重んずる画風を開いた人です。

ある朝、応挙が顔をあらっているとき、通りかかった近所の人々が、はつせの竹やぶの中に、いのししがねているのを見てきたという話をしました。応挙は、

「それはめずらしい。絵にかこう。」

と、写生の道具をかかえて、朝飯も食べずに家をとびだし、話の竹やぶに行ってみました。なるほど竹やぶの中に大きないのししが足を投げ出してねています。応挙はそつと物音を立てないように近よって、すばやくスケッチしました。

それから数日の間、ひとへやにこもって、そのスケッチをも

とにしているのししの絵を仕上げました。

そこへ、たんばの山おくに住んでいる老人がたずねてきたので、さつそくその絵を見せました。すると、

「このいのししは死にかかったところで
すか。」

と、変なことをききますので、応挙はふしぎに思って、

「それはなぜですか。」

と、といただしますと、

「このいのししはじつによくかけていますが、ふつうにねむっているいのししでしたら、全身にもつと張りがあり、毛がい



きいきとしてゐるはずです。おそらく、このいのししは病気でねてゐるのでしよう。」
という話なのです。

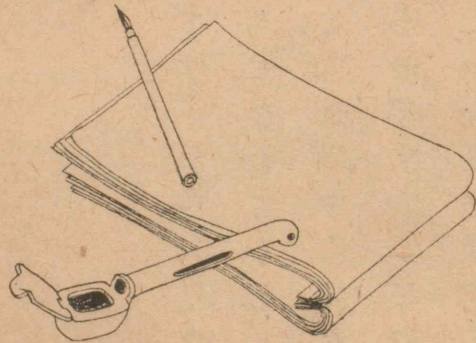
その後、はつせからたきぎを売りに来た人の話によると、そのいのししは、応挙が写生したつぎの日に死んだそうです。短い時間のスケッチに、いのししの病氣であつたことまで写しとつた応挙の写生は、後の世まで有名な話として伝わりました。

○このほかに、広く伝記を読んでみましよう。えらい人、すぐれた人の考えや行いは、みなさんの心をふるい立たさずにはおきません。伝記を読むには、心をすませて読みとる

ことを心がけたいものです。

とくに、心に強く感じたことばや、行いは、読書録にていねいに記録しておきましょう。

○伝記は読みとり、心に感じるだけではなく、それを手本として自分の行い、自分の生活にかかしていくことがたいせつです。



三 子供の家

つぎの新しい時代を作るのは私たちです。私たちは自分のことを自分でするだけでなく、お友だちとなかよくし、力を合わせて新しいものを作りだしていくこと、世の中に役立つことをしていくのです。お友だちと力を合わせてすることにはどんなことがあるでしょう。毎日、学校でしっかり勉強すること、新聞や文庫を作ったり、小鳥やうさぎをかったり、学級園の手入れをしたりすること、まだまだたくさんあります。学校だけではなく近所のお友だちどうしで、いや、世界中のお友だちが力を合わせて楽しくくらししていくことを考えてみましょう。

子供の家

日曜日にぼくたちは出かけていく

屋根に風見の見える家

「子供の家」と書いてある

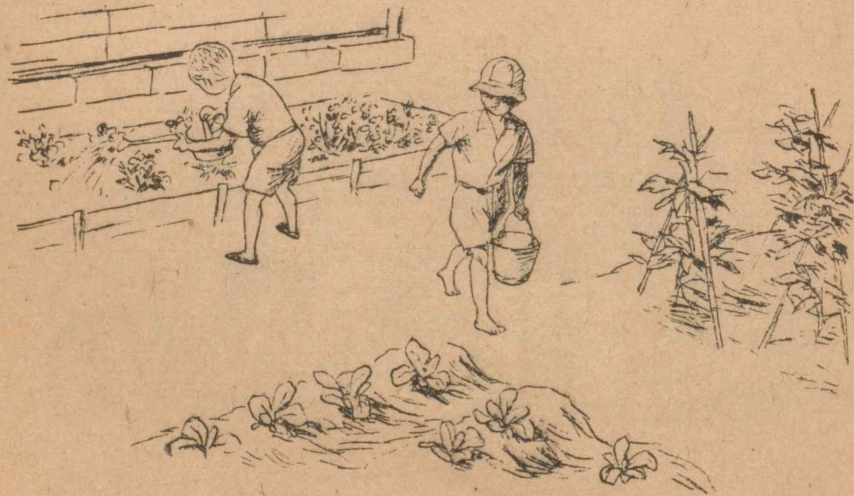
そばにまた、

「どなたでもおはいりください」と

花ややさいをつくるのがすきな子は

花ややさいをつくる

とりやうさぎのせわをするのは



いきもののすきな子

こわれた道具やいすをなおすのは
工作のじょうずな子

また雨の日曜日

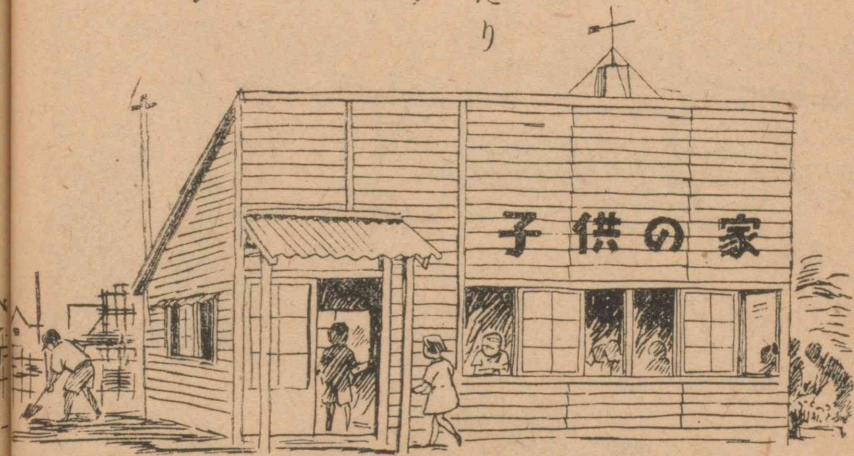
しずかに本を読んだり文章を書いたり
みんなでいっしょにゆうぎをしたり
考えを述べあつて議論をする

楽しいだらうなあ ぼくたちが

そういう家を持っていたなら
みんなが自分の道を進みながら

手をつないで たすけあい
なかよく働いたり学んだりしたなら
ずいぶん楽しいだらうな

「子供の家」は、ゆめに終らなかつた。町の子供会を見てきた長作君は、村の子供会の委員の人に集まってもらつては、町の子供会の組織のことや、その活動ぶりのことを話し、どうにかして、この村にもよい子供会を作りたい。それには、どうしても「子供の家」が欲しいものだ、くりかえしくりかえし話し合いました。長作君が村の子供会のために「子供の家」を欲しがっているところへ、ありがたいニュースがはりました。それは、村でも働き者で有名な五平じいさんからでした。



子供会

稲かりもすつかりすんでしまった、ある日のことでした。五平じいさんが、わざわざ長作君のところにあずねて来ました。そして、思いがけない申し入れをしたのです。

「というのは、ほかでもないが……。わしのなやを、もらってくれないか。」

「え、なやを。」

「うん、わしのなやを、子供会にさしあげようと思うんだがね。ぐあいが悪いかね。作りはしつかりしたものだよ。」

土手の上の五平じいさんのなやといえは、村でも有名な、大きいじょうぶなたてものです。いまどき、それを子供会にただでくれるなんて……。と、いくらか心配になって、じいさんの顔を見ていると、

「どうしたね。暗くって心配なかね。なあに、そんなこたあ、わけはない。まわり中、まどをつけりゃいいんだ。手つだうよ。わしも手つだう。さいわい、町へ行っているむすこは大工だ。さつそくよびよせて、手つだわせる。ものの十日もかかりゃ、わけなしさ。どうだね。」

と、じいさんは、入さしゆびを長作君の鼻先につきつけて、と きふせるのでした。

「ええ、ありがとうございます。ねがってもないことですが、

でも、どうしてあれを子供会に……。」「ほう、もらってくれるかね。これはありがたい。ああ、やれやれ。」

そこでじいさんは、にっこりわらって、

「どうしてもこうしてもあるもんかね。わしもこの年で、なにか一つぐらい、いいことをして死にゃあ、死にきれたもんぢやない。あはは……。これで安心したわい。」

と、もう、こしを上げて帰ろうとするので、長作君はあわてて、「だって、おじいさん。委員会にかけて、みんなとも、よく相談してみなけりやだめだよ。」

「うん、なるほどな。子供会ちゆうものは、そうやるもんかい。じゃあ、なにぶんよろしくたのむよ。」

おじいさんは、めったに人に下げたことのない頭を、ていねいに下げてたのむと、にこにこしながら帰って行きました。さっそく、子供会の全村委員会が開かれました。全村委員会というのは、村中にある子供会の代表が集まって、つくっている委員会です。

初めての報告会の時にやって来た、林ふさ子さん、村田実君、大村よし子さん、山田正雄君なども、委員として集まって来ました。

この委員会には、五平じいさんにも出てもらって、よくわけを話してもらいました。

五平じいさんのなやが「子供の家」になるということが、子供会のけいじ板にはり出されました。

委員会が開かれたあくる日から、まるでありでもたかつたように、大勢の子供たちが、五平じいさんのなやにおしかけて来たので、村の人たちはそれを見て、おどろかないわけにはいきませんでした。

この子供たちの群れは、大きななやの中にあつたがらくた物を、きれいさっぱり、たちまちのうちに運び出してしまいました。それがすむと、えーほい、えーほい、ゴシゴシ、ドンドン。材木を運ぶやら、のこぎりをひくやら、くぎを打つやら、大さわぎです。

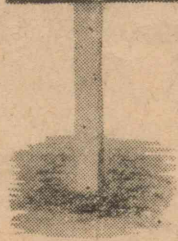
子供たちは、毎日、学校のひけるのを待ちかねたように、五平じいさんのなやにとんで行っては、なにかせつせと働いているのです。

あんまりさわぎが大きいので、村のおとなたちは、いくらか心配にもなつて、出かけて行きました。行ってみてびっくりしました。なんと、五平じいさんのなやの前に、大きなたてふだを立てているではありませんか。

子供の家

けんちくちゅう

ようのないものはいるべからず



おやおや、おまけに、そこで働いているのは、子供ばかりではありません。頭に向こうはちまき、はだぬぎまでして、さかに子供たちのさしずをしているのは、五平じいさんです。それどころか、ほんものの大工さんまで来ています。おお、あれはたしかに、町へ行っているじいさんの末っ子、良吉さんです。

「やあれやれ、親子でまあ、ものずきに。」
と、わらう者もあれば、

「いや、どうして、親子とも感心な
ものだ。」

と、ほめる者もありました。

子供の家を見に来る人は、それか
ら、ますますふえました。村のおと
なの中には、農はん期のいそがしい
時に子供会に手つだつてもらつたり
したことを思い出して、

「これは、だまってはいられぬわい。」

と、材木やお金を寄付してくれる人も出てきました。

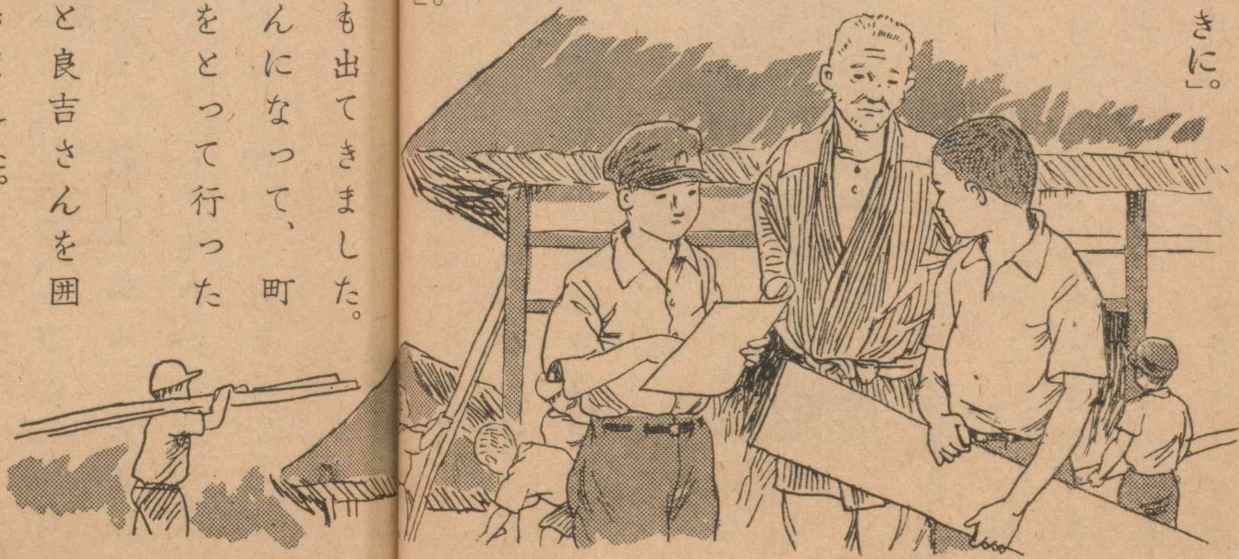
だんだん「子供の家」はひょうばんになって、町
から新聞記者が来て、わざわざ写真をとって行つた
りしました。記事にも出ました。

子供会委員たちは、五平じいさんと良吉さんを囲
んで、ときどき「建築委員会」を開きました。

ある日の休み時間でした。良吉さんが、五平じいさんに

「なあ、おとつつあん。わしは生まれてこの方、まだこんな
おもしろく仕事をやったことはないよ。」

「なにをなまいき言う。生まれてこの方などというこたあ、わ
しの言うことだ。わしこそ、もう八十三年も生きてきて、こ
んなうれいことはないと言わにやならん。」



「あはは……。なるほどね。こいつは、しっけい。」

おとつつあんには、いっぽんやられたけれど、良吉さんはまったく愉快だったのです。初めは、まあ、おとつつあんの言うことだから、これにまどでもつけたら、十日どころか二、三日で、さっさと町へ帰ろうと思っていたのです。それが、やっているうちにだんだんおもしろくなつて、りっぱな「子供の家」にしあげたくてたまらなくなつたのです。それで、仕事もていねいにやるし、子供たちにも、いろいろ大工のやり方を教えたりました。今はまったく、大勢の生徒を持っている、大工学校の先生というわけです。大工学校には、いつも、わらいと歌がたえませんでした。もう、とても十日で帰ることなんか、できなくなりました。

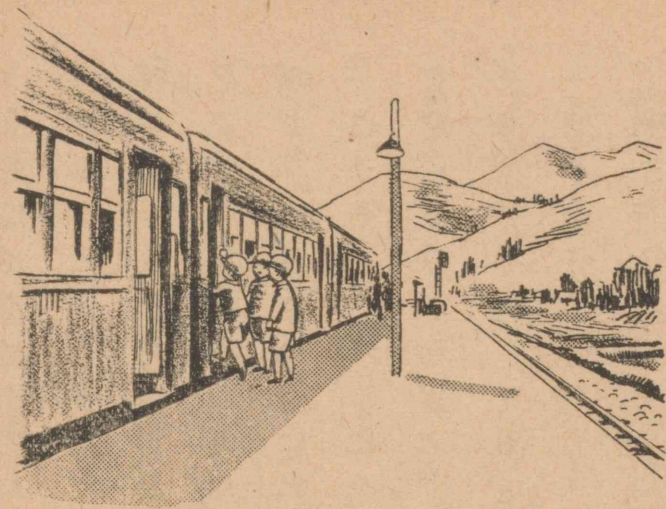
予定はどんどん変わっていきました。家の前には、大きな門を作ることになつたし、長い旗もおも立てることになりました。板でふくはずだった屋根も、トタンでふくことに変わりました。そこで、屋根をぬるペンキの色について、会議が開かれ、太陽のように、まっかにぬろうということに決まりました。

さつそく、汽車に乗って、町までペンキを買いに行こうという意見が出されたのです。これには、だれも反対する者がありませんでした。それどころか、

「ぼくが行く。」

「私が行く。」

と、ふだんはあんまりお使いに熱心でない者まで、行きたがるのでした。だれだって、汽車には乗りたかつたのです。



くじびきで、やっと、行く子供が決まりました。決まった五、六人の子供たちは、大喜びで、遠足にでも行く時のように、い

そいそと停車場へ出かけました。

しばらくして、子供たちを乗せた、

町へ行く汽車の汽てきが聞こえました。

「そうだ、いいことがある。」

その汽てきの音を聞いて、さつきから、行かれなかったことを、残念がっていた川村照夫君が、いきなりさけびました。

「おい、みんな集まれ。」

川村君は、近くにいた子供たちと、

なにか相談しました。するとみんなは、一大事でも起こったように、旗ざおにする長いひのきの皮むきをしていた、長作君のそばへやって来ました。話を聞いて、長作君も言いました。

「うん、そうか。よし、すばらしい考えだ。さっそく、みんなと相談しよう。」

「ばんざい。」

「ばんざーい。」

自分たちの考えが、長作君にもさんせいされたので、みんなは、うれしくてたまりません。ほんとに、こいつをやったら、それこそ、屋根のペンキをぬるところのさわぎではありません。その日の夕方、子供会委員が、みんなそろったところで、長作君が言いました。

「相談というのは、ほかでもないが、ぼくたちの子供の家ができたら、その記念に、子供大会を開こうという意見が、川村君たちから出たのです。みんなは、さんせいですか。どうですか。」

家のできた記念に子供大会を開くなんて、そんなすばらしいことに反対する者なんか、どこにあるでしょう。もちろん、全員さんせいでした。

そこで、さっそく、建築委員会のほかに、大会準備委員がつくられました。

大会準備委員はつぎのことを相談しました。

- 1 大会の目的はなにか
- 2 そのために、大会はどんなことをするか

3 それをどのようにして準備するか

この委員会は、それからあと、何べんも開かれました。

村田先生にも大会のことを相談すると、

「ふだんの活動がみんな現われるのだから、しつかりやりなさい。私もお手つだいしましょう。」

と、はげましてくださいました。ほかの先生方も、いろいろ手つだってくださいることになりました。村のおとなで、手つだいたいという人も、いく人か出て来しました。

近所の村の子供会にも、町の子供会にも、大会の計画を知らせて、招待状を出しました。

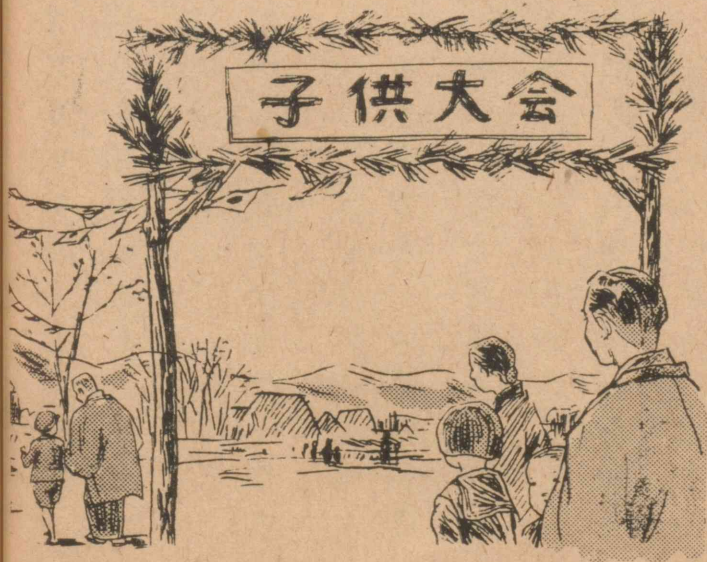
町の協同組合の子供会からは、トラックで三十人の代表が、合唱隊になってやって来る。そして、移動てんらん会もやると

いう返事が来しました。なんとまあ、すばらしいことでしよう。
「子供の家」は、どうとうできあがりしました。そして、あすは
いよいよ、お祝いの子供会です。

朝早く、土手の方から、めずらしい音楽が聞こえてきました。「そうだ、きょうは、子供大会だ。」と思うと、おとなの人たちも、むねがおどりました。

大会は十時からでした。

そのころになると、おとながぼつぼつ「子供の家」の方へやって来ました。としよりどうし、話し合つて



る者、小さい子の手を引いて来るお
かあさんたち、畑へ行くどちゅうら
しく、くわをかついだまま来る者な
ど、いろいろでした。だれの顔にも、
うれしさがあふれていました。明か
るい音楽にさそわれ、会場の近くまでやって来ると、



「ほう。」
と、感心して、だれもが足を止めました。そして、じつと上を見上げました。

すぎのえだを集めてこしらえた、大きなアーチが、そこに立っていたのです。緑もこいそのアーチには、正面の上の方に、「子供大会」と大きな字で横書きした、きれいながくがかけて

子供大会プログラム

午前 てらん会

バザー

野外げき

午後 トラック音楽会

移動てらん会

童話

歌・おどり

人形しばい

子供協議会

夜かがり火まつり

ありました。

「さあ、よくいらっしやいました。

この門をくぐっておはいりくだ

さい。」

アーチはまるでそう言っているように、みんなをむかえてくれました。アーチのすぐ横には、きれいなペンキぬりのけいじ板が立っていました。そこには、会のプログラムが書いてありました。

アーチをくぐると、だれでもあつとさけびたくなるのでした。目がチラチラするほどきれいなのです。

そこは、広い庭になっていて、まん中には、花でかざった大きなちようちんが下がっています。そこから四方八方へ、まるで光のように万国旗がはりめぐらされ、それがゆらゆらとゆらいて、何ともいえない美しさです。まん中のちようちんには、夜になると火がはいるのだということでした。

みんながもつとびっくりしたのは、家の前に、子供会の旗が、長いさおの先にひらめいていたことです。子供会の旗は、赤と緑の地色に、「朝日村子供会」という文字をのせて、ひらひらとゆれていきます。

その旗のまわりには、大勢の子供たちが集まっていました。もうじきバザーを開くので、店の用意をしているのでした。あちらにも、こちらにも、花のきしよをむねにつけた子供たち

が走りまわっています。音楽は、たえず流れてきます。

ああ、村のおまつりだって、こんななにぎやかではないでしょう。それにしても、あの「五平じいさんのなや」が、今は、きれいな西洋館に変わっているのは、これこそ、何としたことでしょう。風でさえそこにさわればそまりそうなほど、つやつやした赤い屋根、白くペンキをぬった大きなまど。こんな西洋式の建物は、村中どころか、この近く、どこをさがしたってありません。むかしのあの古い、うすよごれたなやと、この明かるい西洋館とが、どうして同じ家と思えましょう。みんなは、もう一度、目をこすって見直すのでした。

ちようどそこへ、家の中から、きみようなかつこうをした男がひとり出て来たのです。その男は、仕事着のむねに、大きなひまわりのきししょうをつけ、頭にはうめの花のかんむりをかぶり、顔にはくまどりをし、ほおからあごにかけて、まっ白な長いひげをはやしています。

「やあ、やあ。」

と、その男があいさつをするので、村の人は、おどろいて顔を見直しました。

「おうつ、こりやどうじゃ。五平じいさんじゃないか。どうしたというんじゃ。」

村の人は、おどろいてそばへよって来ました。すると、五平じいさんは、

「なあに。きょうは、特別のお客さんに招かれてな。招かれたはいいが、このとおりさ。子供たちと野外げきに出ることに

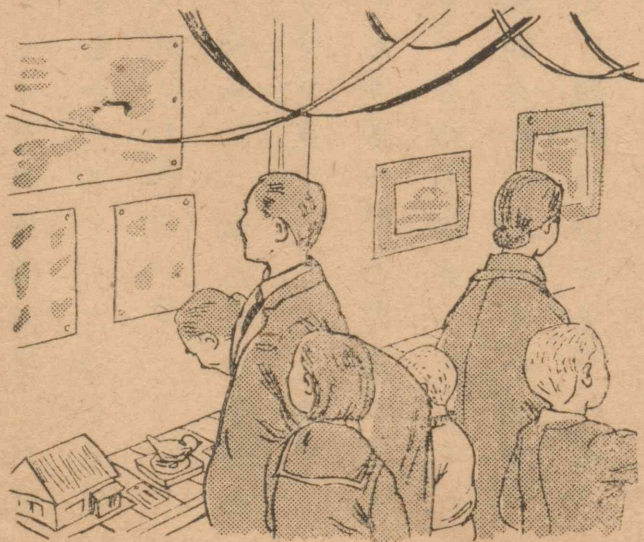
なった。わしも、すっかりわかがえったよ。あはは……。
そういったまま、さっさと行きかけましたが、またもどつて
来て、

「じつはな……。きょう、わしは、生まれて初めて、演説ちゅうものをやりますからな。どうか、ゆつくり居て、聞いてくだされ。」

その時、拡声器がピタッと音楽をやめました。そして大きな声で、

「みなさん、よくおいでくださいました。これから、てんらん会が始まります。どうぞ『子供の家』へおはいりください。」
と、さけんでおります。

子供の家、おお、何というすばらしい家ができたものだろう。そこは、学校の教室を二つ合わせたくらいの広さで、ゆか
はつるつるの板ばりです。明かるい
まどが三方についていて、そこから
さしこむ朝の光は、新しいてんじょ
うから下がっている色テープの美し
いかざりや、かべにはってある絵や
文字の上を、やさしくなでています。
子供会委員たちは、むねに大きな
花のきしゅうをつけて、会場の中を
行ったり来たり、外へ出て行ったり、
たいへんないそがしさです。



子供会の目的

- 一、いつも眞実をもとめる
- 一、じょうぶなからだをつくる
- 一、平和な日本をつくる

てんらん会の説明係は、お客さんをむかえると、さっそく説明を始めました。

「まず初めに、私たちの子供会のようにすを見ていただきます。」

私たち子供会の目的はここに書いてあります。この三つです。子供会は、村中に、今十二あります。その子供会から、それぞれ代表の委員が出て、村の子供協議会をつくっています。ここで、各子供会のやっていることを報告し合って、いろいろな意見を述べ合います。

各子供会は、会長・副会長を持ち、いろいろな組織を持っています。たとえば、大きくは文化部、生産部、会計部の三つ

に分かれ、その下に読書クラブ、演げきクラブ、工作クラブ、写生クラブ、ラジオクラブ、スポーツクラブ、ごらくクラブ

などあって、それぞれ楽しく活動しています。

「これは、私たちが考えた、理想の村のもけいです。」

「これは、防火のポスターです。」

「これは、私たちの研究した記録です。」

「これは、私たちの村にある植物の標本です。」

「これは、害虫・益虫の標本です。」

「これは、はい物利用の作品です。」

みな、子供たちが作った物とは思われない、りっぱな物ばかりです。

てんらん会のいちばんおしまい品評会で、そこ



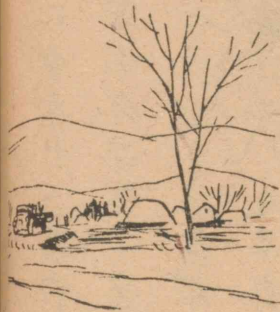
には、子供農園でとれた野菜がたくさん出ていました。野菜のそばには、「この野菜は売ります」というたてふだも立ててありました。

ふと、出口の所を見ると、大きな紙に、世界中の子供がなかよくまるくなって、手をつないでいる絵がかいてあり、それには、「あなたに幸福をあげます」と、大きな文字で書いてありました。

子供の家の庭の方では、バザーが開かれており、おもしろい

野外げきも行われておりました。

午後は、町の子供会からの応えんが、トラックに乗ってとう着し、「世界の子供」という移動てんらん会が開かれ、にぎや



かな音楽会が開かれました。それに続いて、童話・歌・おどり・人形しばいなどが行われました。

秋の日はいつの間にかくれ始め、美しい夕焼け雲が西の空にたなびき、村の私たちは、すばらしかった子供会のもよおしに、みな感心して家々に帰って行きました。

子供の家には、ぱっと明かるい電燈がつき、その下では、子供会の委員があとかたづけをすませて、つぎの子供会についての協議会を開いています。



四 北の国・南の国

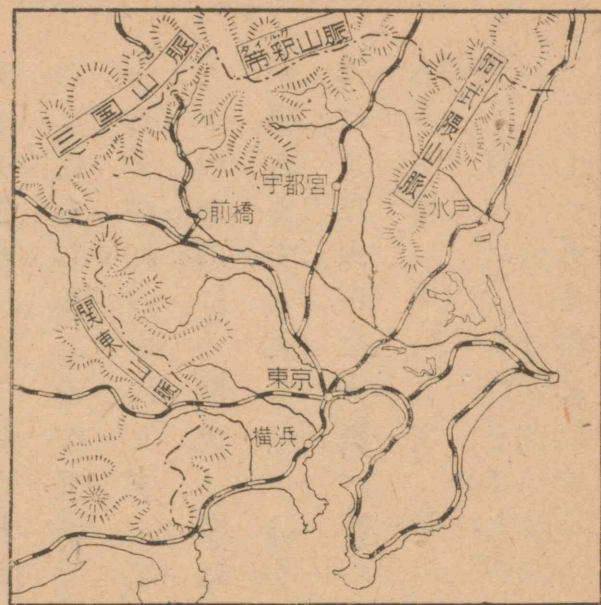
秋から冬へ

十一月にはいると、東北、北海道、北陸一帯は、日一日と暗い寒いお天気におそわれます。雨がいつの間にかみぞれに変わり、黒雲をつきやぶって、大つぶのあられが、すばらしい勢いでたたきこんで来ます。けさはめずらしくよいお天気だと思つて、外へ出てみると、馬のあ



しあとやげたのあとに、ガラスのようない氷がはりつめていて、なにげなく歩く足の下で、パリン、パリンと歯ぎれのよい音をたてます。それもおおかた夕方までにはくずれてしまつて、かきねにとり残されたきくの花が、小つぶながらもあざやかな色をして、やがてやつて来る冷たい雨とともに、くれやすいたそがれの中にしずんでしまいます。

それなのに、関東・関西は、きりりとすんだ青空の日ばかりが続きます。もくせいはいはうつとりとかおり、かれた草むらの中にはまだ虫が生き残つていて、さびれた声で、とぎれがちではあるが鳴いています。早い所では、麦の芽がうつつりとふきいで、時には、季節をまちがえたちようが飛んで来ることもあつて、十一月小春とはよくいったものだと思われるほどです。



いったいどうしてこんなにちがうのでしよう。地図を見て日本の山脈がどんな方向に走っているか調べてみましょう。東京を中心として考えれば、一つは西の方へ、一つは北の方へとつつみのように続いています。

ところで、南東風にあたためられた夏の日本は、冬にはいつて、シベリアからやって来る北西風にこおらせられます。これを季節風といいます。なぜこんな風が起こるのでしよう。ついでに考えてみましょう。さて、このあらっぽい北西風が、高い山

続きにさえぎられて、けっきょく、前に言ったようなちがいになつてしまうわけです。

天候のちがいは、私たちの着物や食べ物や住居などに深い関係があります。そればかりではありません。長い間そうしたくらし方になれているわけですから、ことばも、物の考え方も、行動も、いつの間にか少しずつ変わっていくことが考えられます。ですから、東北には東北の良いところがあり、関西には関西の良いところがあります。良いところはおたがいにとり入れて、自分たちをりつぱにすることがたいせつですし、それといっしょに、自分の良いところはけっしてなくさないように、つとめようではありませんか。

大川君 お元気ですか。

おわかれしてから、いつの間にか八か月にもなっていました。またね。こちらはおかげで元気にくらしております。御安心ください。

北国のほうが少しお知らせしようか。

夏の暑さは東京とあまり変わりませんが、九月になると、急に秋のすがたになり、十月は福かり、十一月にはいると、冬のけはいが山のみねから、畑のすみからしのびよって来ます。寒さに強い北国の人、あわせを綿入れに着かえて、

むくむくとふとたすがたになります。

北国の秋の空はとももきれいです。

じっと見上げてみると、目玉が青くそまうてしまうような気さそえます。ぼ

くは原っぱでこの青空を見るのがすま

い、おばなをすかしては、ながめるの

で、野球の友だちから、「おい、何して

いるんだい。」などと、よく言われまし

た。

楽しかったのは十月のきのこ狩りでした。うるしやぬるでの葉がチェリーブの木のぐをぬりつけたように赤くなり、朝



つゆにぬれた山道にはいると、山のしめったにおいの中に、
きつこのにおいがぶしんとかおってくる。友だちに教えら
れて、よく見ると「はったけ」や「しめじ」がたくさん頭を出し
ている。ほくありませんか。ほくはむちゅうにならうて取り、
たちまちかごにいっぱい取って家に帰りました。

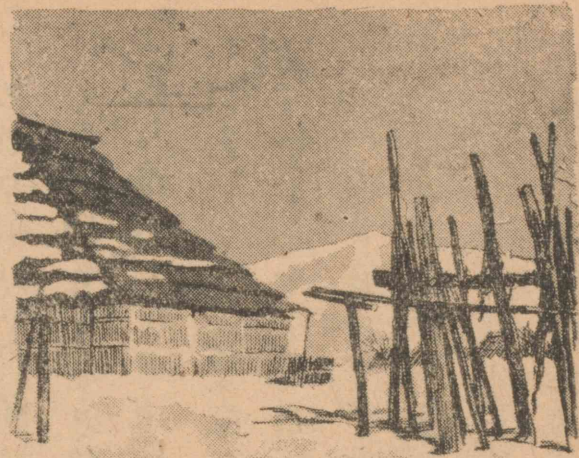
十月にはどこの家でも冬じたくにとりかかります。ひと冬
中食べるつけ物が大きなたるで、いくつも作られたり、スト
ーブにたくたきぎが家のまわりに山のように積まれます。

このころは寒いといつても、野球ができるし、遠足にも行
けるし、かりあとのたんぼで思っぞんぶん遊べます。

もみじの美しさにはびっくりしてしまいます。北国のもみ
じは東京の方よりはちがひ、一本一草残らずもみじするので

す。それが急に、パツと色づくのです。赤もあれば黄色もあ
り茶色もあり、その中にときわ本の緑の葉がまじっている
ので、まるで、美しいパレットを見るようです。けれども、
虫の音がいつの間にかひっそりとしてしまい、ことに、し
ぐれが通りすぎる夜などは、さびしい気持になります。そ
んな夜は、くりを焼きながら、たきぎの燃えているいろり
にあたって、東京のなつかしい話をくりかえすのです。そ
のころから、冬はぐんぐんおしよせて来ます。

十一月も半ばすぎたこの間のばん、ひどく寒かったので、
朝起きてみたら雪が五、六センチメートルも積もっている
のです。きのうまで遊んでいたたんぼも原っぱも雪でまっ
白になっっているのには本当にびっくりしました。けれども



この雪はすぐに消えてしまいました。
こいした雪が何回かふっては消え、
消えてはふって、根雪になるのだそ
うです。根雪は来年の春までとけず、
その上にずんずんふる雪が積もるの
だそうです。たいてい一メートルか
ら二メートルぐらい積もるそうです。
お友だちはもう、スキーの話で大き
わぎをしています。

このように雪が来始めると、どこの家でも「雪囲い」というも
のを始めます。わらや板で家のまわりを囲ったり、高い高
いへいを作ったり、入口やげんかんをさやどうのよいに包

んだりしております。北国の人が雪に對して、こまこまと
準備をするのにはおどろきました。ぼくはまだ話だけで、
雪の美しさや、スキーのおもしろさや、雪のおもしろさは
わかりませんので、雪についてのことはお知らせできません。
ずいぶん長くこちらのことはばかりくだくだと書いてしま
いました。

別便でこちらの名物のりんごをお送りいたしました。本が
らもいだけかりのものはこにつめたものです。みなさん
でめしあがってください。

十一月二十日

さよなら

田村一郎

大川明君

東京からのたより (手紙二)

田村君 お手紙とりんごありがとうございます。ごいりました。
お手紙によって、東北の秋のようすがよくわかりました。
りんごはとてもおいしくて、家中の者が大喜びでした。一
ばん末の弟は「このりんごおいちい、おいちい」と言って
手からはなしませんでした。

ぼくはお手紙とりんごを学校へ持って行き、お手紙は朝の
ニュースの時間にお友だちに読んで聞かせたところ、先生
もお友だちも、みんなきみをなつかしがり、東北の秋のよ
うすがよくわかるから、田村君からのおたよりとして、校内

のラジオ放送をするといい」と、さかんにすすめるので、
きょうのお昼の時間にとび入りで放送しました。りんごは
十二ほど持って行ったので、回画の時間に六つのグループ
に分かれて写生をしました。そのあとで、みんなで少しす
つ分けていただきました。

きみからくわしく東北の秋のようすを知らせてもらいまし
たので、東京の秋のようすをお知らせしようと思いましたが、
東京のことはきみが居た時とあまり変わりないので、
むさし野の秋のようすと、学校の近ごろのことをお知らせ
いたします。

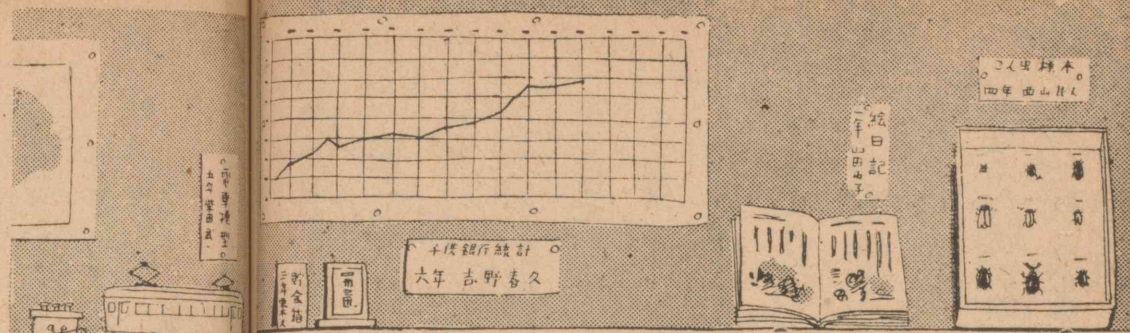
きみがすきだったむさし野の雑木林もけやきも、もみどし
始めました。コバルト色にすみきった空に、ちちぶやたん

ざわの連山がくっきりとうきだし、
富士山にはもう白く雪が見えてお
ります。はるかかなたの空から、
ごまをまいたように黒いかたまり
が見えたかと思うと、そのかたまり
りは、大きくなり、小さくなりし
て近づき、サーツというはおとと
ともに、おもしろくそうぞうしい
おしゃべりが、雑木林やけやきの
こすえに始まります。これはむく
どりです。時おり一わ、また一わ
「キイキイ、キイキイ」と鳴きながら、



高い空を飛んで行く鳥がある。寒
い国からわたって来たつくみです。
山かげに、低く「クク、クク」とから
だをかがめながら鳴くじよびた
きも見かけます。コスモスの花が
ちり残り、やぶかげの茶がひっそりと花をのぞかせ、むさ
し野の秋は静かに深まっていきます。
学校では、九月の初めに、夏休み作品てらん会を各教室こ
とに開きました。そのあと、各教室からすぐれた作品を文
化室に集めて展示会を開きました。こころはみんながはり
きったので、りっぱな作品がたくさん出ました。その中に
は、ひとりの作品ではなく三、四名の共同作品もありました。





特に目についたのでは、一年生の絵日記でまん画のように連続して夏休み中のできごとを書いたの
 がありました。二年生の女の子が書いた「私の家
 のまわり」という絵地図も、よくできていました。
 三年生では、「大むかしの人々」という紙しばいに
 はおどろきました。この紙しばいは絵だけでな
 く、人の手や足が動くようなしかけになってい
 ました。四年生には、ひとりでこん虫の標本を
 五はこも作っている人がありました。五年生は
 共同製作で、六人の人が共同して、大むかしか
 らの家のうつり変わりをむけいに作って出して
 ありました。六年生は、これも共同製作で、日本

の物産」というパノラマ地図や、電気どかけで、
 本当に走る電車や、モーターボートを作って出
 してありました。

保谷の農園はこどもも豊作で、おいもがたくさんとれ、農
 園のおばさんにたのんでふかしていただき、くりの本の下
 で、みんなが食べました。ほくほくしていてあまく、くり
 のようでした。くりといえは、こどもはくりもたくさんなり
 ました。

十月十五日に、運動会がありました。赤組一五五、白組一
 四五で、赤組が勝ちました。PTAの「東海道五十三次」とい
 って、竹で作ったかごに人をのせて運ぶリレーは、とても
 おもしろかったです。

遠足は日光へ行きました。天気はめぐまれ、山はみごとにもみどりしており、大谷川の氷が岩にだけてしおきをあげ、まるで絵のような美しさでした。

なおこの外に、研究クラブの発表会や、子供会のこともあります。あまり長くなりますからこのつぎにします。

言っておくれてしまいました。ぼくも家の者も、おかげでみな元気です。どうか御安心ください。なお、おしいりんごをたくさん送っていただきました。ぼく



こちらには名物がありませんので、きみのすきな科学の本と、科学者の伝記の本を小包にしてお送りいたします。それから、きみからいただいたりんごの写真を本の間に入れておきますから見てください。

さよなら

文川 明

十一月二十七日

田村 一郎 君

五 冬晴れ

冬の子ども

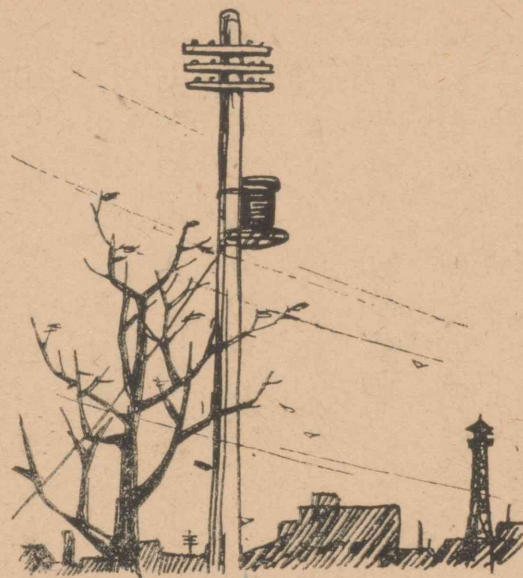
まっかなほっぺたと、
まっかな耳と、
まっかなくちびると、
まっかなまるい小さい手と。
みんなまるまる着物を着て、
まっしろなしもの朝、
かたいガラスばりの空気をわるように、
飛んでくる五六人の子ども。



小さいじょうききかんのように、
みんなぼっぽと白いけむりをはきながら、
あとからも、あとからも、
まじゆつのように、地面からわいて
横にさす朝日の中を、
飛んでくるいく百人の子ども。
男の子も、女の子も、
なにかめずらしい国語で、
ふしぎなことでもさげんでいるよう。
見ているとひとりでにほおえまれ、
世の中が大きくなり、
しまいにあははとわらってしまふ。



ほら、
学校のかねが鳴る。

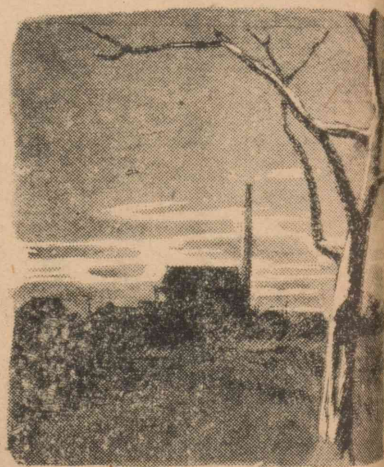


北風のふえ

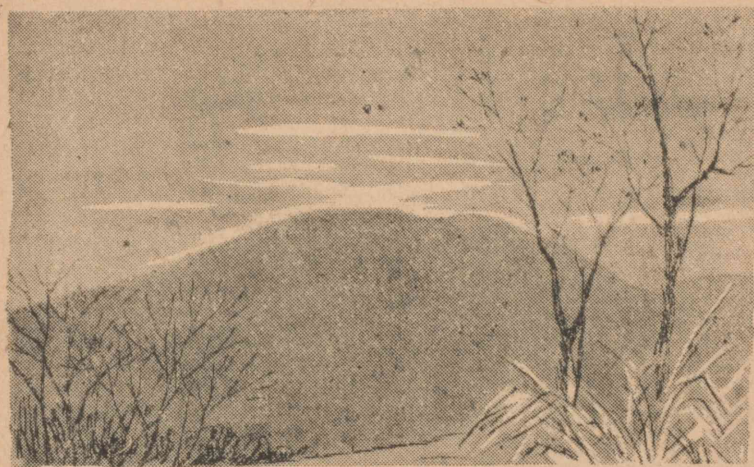
北の国から北風が、
ことしもふえをもつて飛んできた。
電信柱がそれをもらった。
がいろじゆもそれをもらった。
火の見やぐらもそれをもらった。
みんなぴゅうぴゅうふきだした。

冬のスケッチ

だんだんと遠い近い木立のりんかく
がくつきりとして、青いみかんの皮が、
日にあたった部分から少しずついろど
られていくように、東の空がうすく黄色にそまって、だんだん
それがこくなって、そして寒く冷たいうちにも、ほっかりとあ
たたかみをもつように明かるくなってきて、朝日が静かにのぼ
り始めた。



鏡には、ガラス戸ごしに、向ここの葉を落としたプラタナス



がうつつっている。このとこやさんの前は
電車通りで、時おり電車が通り、いろい
ろな人が通る。風を切つて走るジープも
うつる。鏡の前の台には、大きなびんや、
小さなびんや、クリームがならべてある。
鏡につきつぎとうつるものを見ている
うちに、すっかりすんでしまった。ガラ
ス戸から日がさしてきて、へやはパツと
明かるくなった。私はお金をはらつて外
へ出た。なんだかさっぱりしたような氣
がする。

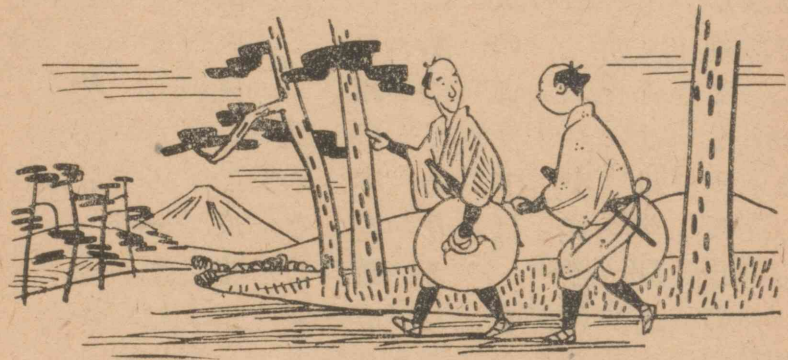
○

日がくれかかって、風が出てきた。頭の上を見ると、はだか
の雑木のこずえがゆれて、えだとえだどがふれ合っている。
空はうす青くかわき、冬の日、箱根山の上に赤い一だんのは
もんをえがいて、見ているうちに、じゆくした果実が水にし
ずんでいくようにしずんでいく。私は寒くなって、ぶるぶると
からだをふるわせていた。足もとには山かやのかれ葉がみだれ
て、落葉のにおいが鼻の先にしみてくる。

○冬の初めの情景をよく見て、絵にかくように文でスケッチ
(写生) してみましよう。

写生の文は、目にうつったままを、そのようすをあらわす
し、くりしたことで、すらすら書くことがたいせつです。

六 ひざくりげ



「やじきた」の話は、みなさんの中には知っている人が多いと思います。よく、えい画になったり、しばいなどにも演じられていて、むかしのおもしろい物語です。この物語の本当の名は、「東海道中ひざくりげ」というのです。「くりげ」というのは馬の毛色ですが、「ひざくりげ」というと、歩いて旅をすることをあらわしています。東海道五十三次の長い道を、弥次郎と北八のふたりの旅人が、てくてく歩いて行く道すがら、各地でこつけないことをしてかすことを書きつづつたもの

- スケッチした情景を、俳句や短歌や自由詩に作ってみましよう。
- 写生の文や、俳句、短歌、自由詩には、かんたんやさし絵を入れるとよい。
- 自分の文や、俳句、短歌、自由詩は、まとめて文集にしておきなさい。

のです。

この物語は、今から百余年ほど前、十返舎一九という人がつくりました。一九は本名を重田貞一じゅうた けいいちと書いて、するがの国（今の静岡しずおか県）の府中に生まれました。わかい時、江戸（今の東京）に出て、役人などをしたこともありましたが、後にやめて、こっけいな話の本を書きました。一九は生まれつきまじめで、物事には熱心でありました。「東海道中ひざくりげ」に出てくる五十三次のようすは、自分自ら旅をして見て来たほどです。その当時は、人々が文学に親しみ、としよりも子供も、女の人も男の人も、あまり学問をおさめない人々にもわかるさまざまな読み物が本となって世の中にひろまりました。それまでは、貴族や、ぼうさんやさむらいなど、ある一部の特別な人々だけが本に親

しんでいたのですが、江戸時代になると、人々がみんな楽しく本を読むようになりました。そのころは士農工商などというおきてがきびしかったのですが、本を読むことだけは自由でした。

「東海道中ひざくりげ」は、江戸から大阪おおさかまでのことですが、後に、さらにこの続きとして、四国のこんぴらもうで、宮島見物、木曾道中をへて善光寺もうで、上州（今の群馬ぐんま県）草津くさつ温泉せんにあびて江戸に帰るまでのことが書きつづられました。しかし、何といつても、東海道中五十三次が、人々におもしろくて喜ばれたようです。

どの話も、はらをかかえてわらうようなおもしろいことばかりです。読み始めたら、おもしろくてやめられなくなります。



小田原の宿

むかし、江戸に、弥次郎と北八という男が
ありました。ふたりは一度京見物（京都見物）
や伊勢まいりをしようというので、江戸をたつて、東海道を歩
いたり、かごに乗ったり、馬に乗ったりしながら、二日目の夕
ぐれに小田原に着きました。宿をとつて、わらじをぬぎ、足を
あらつてざしきへ通りました。まもなく、女中がたばこぼんを
持つて来て、

「もしもし、お湯がわきましたから、どうぞおはいりください。」
と言いますと、弥次郎は、

「湯がわいたら熱くてはいれるものか。水が湯にわいたと言え
ばよいのに。」

と言つて、からかいました。北八は、

「弥次郎、おまえ先にはいつてくれ。」
と言いましたので、

「よしました。どれ、はいりましょう。」

と、弥次郎は手ぬぐいを下げて、ふろばへ行つてみると、おど
ろきました。これまで見たこともない変なふろです。この宿屋
の主人は上方（京都）の者とみえて、上方によくある五えもん
ぶろという変わったふろだったので、土でかまを作り、その
上にうすつぺらななべをかけ、それにふろおけをつけ、湯のも
らないように、しっくいがかためたふろです。それで、たきぎ

もたくさんいらず、たいへん便利なものです。このふろには、ふたというものがなく、底板が水の上にういているので、ふたの代わりにもなつて、早く湯がわくことになるのです。それで、はいる時には、底板を下へしずめてはいるのです。ところが、弥次郎は今まで、こんなふろを見たこともないので、そのういている板をふたと思ひこみ、そつと取りのけて、ずつとかた足を入れました。

「アツツツツ……。これはとんでもないふろだ。」

底は鉄のかまです。弥次郎は足にやけどをしてしまいました。しかし、どうしてはいるのだときくのもばかばかしいので、外であらいながら、あたりを見まわすと、庭にげたが一足おいてありました。これさいわいと、そのげたをはいて、湯の中には

いりました。そうして、いい気持になつて歌を歌っていました。

そこへ、北八が待ちくたびれてやつて来て、

「さあ、弥次さん、いいかげんにあがらないか。」

と、さいそくしました。弥次郎は、やがて湯からあがり、げたをそつとかくし、知らぬ顔して、

「さあ、おはいりなさい。」

と、言ったので、

「よしきた。」

と、北八は、すっぱだかになり、いちもくさんにふろへ行つて、足をつっこみました。

「アツツツ……。弥次さん、たいへんだ。ちよつと来てくれ。なんだ。やかましいな。」

「おまえ、このふろへどうしてはいったのか。」

北八は、足のうらをさすりながら、弥次郎に言いました。弥次郎は、得意そうに言いました。

「ばかな、べつにはいりようがあるものか。外でかけ湯をして足から先にどぶんとはいるんだ。」

「いや、かまがじかにあって、はいれるものか。」

北八はひりひりする足のうらをさすりながら、あたりを見まわしておりました。弥次郎がざしきに行ったあと、かくしてあつたげたを見つけて、それをはいてどぶんとふろへはいりました。なるほど、いい気持になるものだ。

北八は、いつの間にかよいきげんになって、歌を歌いだしました。でも、長く湯にひたっていると、底の方が熱くなつてき

ました。立ったりすわったり、げたばきそのまま、ガタガタふんでいますと、とつぜんふろの底がぬけて、湯はすっかり流れ出てしまいました。

「やあ、たすけぶね。たいへん、たいへん。」

このさけび声を聞いて、弥次郎がとんで来ました。宿の主人もびっくりして出て来ました。

「どうなさいました。」

「いやもう、命にはべつじようはないが、ふろの底がぬけて、アイタタタタ……。」

主人は北八のようすを見て、



「これはまた、どうして底がぬけました。」
「つい、げたでガタガタやったので。」
「いやあ、あなたはとんでもないお方だ。ふろへはいるのに、
げたをはいてはいるということがあるものですか、とんでも
ない。」
主人ははらをかかえてわらいました。

大井川おおいがわ

ふたりはするがの大井川までやって来ました。
川岸にある島田の宿に着くと、かごかきたちが
大勢寄って来て、その話では、きょうは水が多



いので、れんだいわたしでないと川がこせない
ということですよ。

(むかしは大井川に橋がかかっていなかっ
たので、人のかたに乗ったり、れんだいとい
う、人のかつぐ台に乗ったりして、川をこ
したものです。)

弥次郎は川をわたす人夫にききました。

「いったい、いくらでわたす。」

「おふたりで八百文ください。」

「それは高い、高い。」

「それではいくらくださるか。」

「いや、もうけっこう。おまえたちのせわにはなるまい。」

そう言いながら、足早に通りすぎて行きました。

弥次郎は北八に言いました。

「いつそのこと、問屋にたのんでこそう。おまえのわきざしを貸してくれ。」

「どうするのだ。」

弥次郎は北八のわきざしを取ってさし、自分のわきざしは、さやぶくろをあとの方にずらして長くして、大小のわきざしをさしたように見せかけながら、

(そのころのさむらいは大小二本の刀をさしていたものなのです。)

「どうだ。これでりっぱなさむらいに見えるだろう。このふろしきづつみをおまえいっしょに持って、お供になってついて

来い。」

「こいつはおもしろい。ハハハ……。」

と言いながら、北八は弥次郎の荷物をいっしょにかたにひっかけました。

弥次郎は、人夫の親方のところへ行って、さむらいらしいことばつきで言いました。

「これこれ、身どもはたいせつな主人の用で通る者だ。川ごし人夫をたのむぞ。」

「はい、かしこまりました。御同勢はおいく人でございますか。」

「なに、同勢か。さむらいが十二人、やりもち、はさみばこ、ぞうりとり、その他合わせて、三十人余りじゃ。」

「はいはい、その御同勢はどこにおいてでございます。」

「いや、江戸を出立する時には三十人もいたが、道中でおいおいと病気をいたし、宿屋に残しておいた。それで、ただ今、川をこそうという同勢は、上下合わせてたったふたりじゃ。台ごしにいたそう。いくらじゃ。」

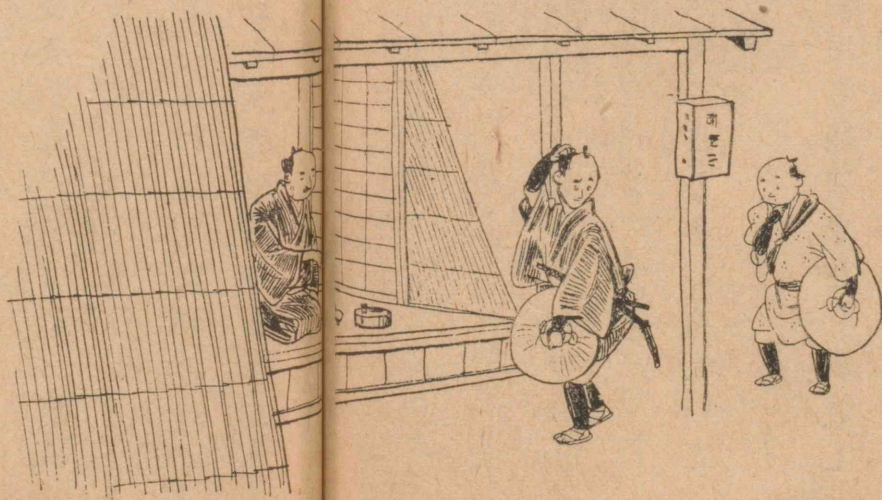
「はい、おふたりなら、れん台で四百八十文でございます。」

「そりゃ、ちと高い。少々まけろ。」

親方は急にことばを変えました

「この川のわたし賃に、まけろということがあるものか。ばかなことを言わないでさっさと行くがいい。」

「なに、さむらいに向かつて、ばかと言うのはなにごただ。」



「ハハハ……。似あわないおさむらい

だな。刀の先を見さっしやい。」

ふりかえってみると、刀のさやぶく

ろが柱につかえて、「く」の字に曲がつ

ているではありませんか、みんながどつとわらいだしたので、

さすがの弥次郎もめんぼくなく、しよげかえってしまいました。

「仕方がない。さあ、弥次さん早く行こう。」

と、北八にさそわれて、弥次郎はこそこそとその場をにげだして行きました。

「ついやりそこなつた。いまましい。」

弥次郎はくやしがりしましたが、仕方がありません。それからふたりは、急いで川ばたに行き、れん台のねだんを決めて乗り

ました。

大井川の水はどうどうとさかまき、目もくらむばかりです。今にも命がなくなりはいまいかと思うほどのおそろしさです。東海道第一の大きな川で、水の流れが早く、石まで流れるほどです。そこを、ひやひやしなから、やつのこととて川ごえをして、れん台からおりました。ふたりはほつとして喜びました。そうして金谷の宿に着きました。



大原女

(大原女というのは、京都の近くの大原という所の女の人のこと)

で、頭にいろいろな物を乗せて、京都の町へ売りに来るのです。

どうとう弥次郎と北八は京都の町に着きました。日もようやくくれかかった四条通りを歩いていると、大原女たちが五六人、しばや、たきぎや、すりこぎや、つちや、はしごなどさまざまなものを、何でも頭にのせて売り歩いていきます。

「れんぎいらんかえ、はしご買わんかえ。」

「たきぎ買わんかえ……」

弥次郎も北八も、めずらしそうにながめていました。すると、ひとりの大原女が、弥次郎のそばへ寄って来て、「どうぞ、このれんぎ買うておくれ。」と言いました。

「なに、すりこぎか。ああ、買いたいが、こりや細い。わしたちの所じゃ、材木のような、四角なすりこぎでなくちゃまにあわないよ。」

弥次郎はじょうだん半分にからかいました。

「オホホホ……。四角なれんぎで、みそをするなら、おおかたすりばちも四角やろな。」

ほかの大原女たちもみな寄つて来て、弥次郎と北八をめずらしそうに見ました。

「あの、れんぎおいやなら、はしご買うておくれ。」

「ハハハ……。はしごか。おもしろい。いくらだ。」

「きようは売れないから、安くしてあげます。七百文にしておきましょう。」

「それは高い高い。二百文なら買ってやろう。」

と、弥次郎が言いました。大原女は、

「だんな、それはあんまりですよ。五百文にしておきましょう。」

「いやいや、二百文でなくては買わないよ。」

「ようございます。二百文にまけてあげましょう。」

「やあ、本当にまけるのか。こまったことを言うなあ。」

「さあ、持つて行ってください。」

「いくら安くても、はしごを買ってもどうしようもない。こまったなあ。」



「よいはしごです。さあ、持って行ってくださいな。」

「こいつはあやまる。わしらは旅の者だ。こんばんは三条にと
まろうというのだ。はしごを買ってもしようがない。あやま
る、あやまる。」

「何をおっしゃるの。いらぬものなら、どうしてねだんをつ
けました。」

「それはもう、ねだんをつけたのはたしかに悪い。けれど、た
もとかふところへはいるものなら、買ってやろうが、なん
としても、このはしごじゃどうにもならない。」

「それじゃ、わたしらをからかおうとなさったのかね。わたし
らは商売や、さあ、持って行ってください。さあ、持って行
ってください。」

弥次郎は大原女たちにとり囲まれてせめられ、弥次郎がどん
なにいらぬと言つても、大原女は聞き入れません。

ものみだかい京都の人たちは、何が始まったのかと集まって
来て、ぐるぐるととりまきました。弥次郎はにげるわけにもい
かず、大こまりにこまりました。そうして、とうとう、二百文
を出して、はしごを買わされてしまいました。

「こいつはつまらない目にあつた。北八、おまえこれをつい
てくれ。」

「ええ、とんでもない。」

こうして、四条通りから寺町の方へ歩いて行きながら、弥次
郎は、ぶつぶつ言い言い、はしごをかついで行きました。

「北八、少しはつきあつてくれよ。」

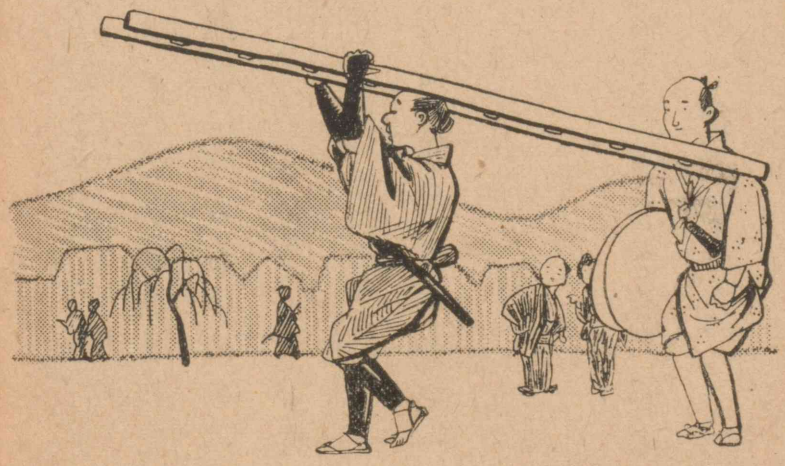
「気の毒なことだわい。大原女のように頭に上へのせたらどうだい。」
「なるほど、なるほど。」

弥次郎は、手ぬぐいをたたんで頭へのせ、はしごをその上へのせて、両手でささえて歩いて行きました。すれちがう京都の人々は、

「こりゃ、へんな男だな。あぶなくて見ておられない。」

と言って、わらいながらながめていました。

ふたりは、それから、長いはしごを



もてあましながら、京都の町をぶらぶらと歩いて行きました。夕やみが静かに町をつつんで、かも川づつみのやなぎの木かげに、ともしびがちらちらと見え始めました。

○ 東海道五十三次の宿場や、むかしの旅のようすを調べてみましょう。

○ この話を、紙しばいや、人形しばいにして実演してみましょう。

ことばの表

| | | | | | | | |
|-------------|----|-------------|----|--------------|----|---------------|----|
| ○アーチ | 六 | あわせ | 六 | いなだ | 八 | えちず | 六 |
| あおぞら | 三 | アントワープ | 三 | いなほ | 八 | えど | 七 |
| あかぐみ | 七 | ○いいかげん(に) | 九 | いのしし | 二 | えにっき | 六 |
| あかぎ | 八 | イギリス | 九 | いまいましい | 二 | えらい | 一〇 |
| あかつき | 七 | いそいそ(と) | 六 | いまだき | 二 | えんげき | 九 |
| あけはなし | 三 | イソップものがたり | 六 | イリノイしゅう | 二 | えんじられて(えんじる) | 九 |
| あご | 三 | いたって | 三 | いろテープ | 二 | えんぜつ | 六 |
| あさつゆ | 七 | いたばり | 六 | いろどられて(いろどる) | 三 | ○おいくにん(いくにん) | 一〇 |
| あさひむら | 三 | いちじく | 六 | いろり | 三 | おいしげった(おいしげる) | 三 |
| あさゆう | 七 | いちだいじ | 六 | インデアナしゅう | 三 | おいちい | 二 |
| あしばや | 七 | いちぶ | 六 | ○うきだし(うきだす) | 六 | おいや(いや) | 一四 |
| あせみどろ | 一六 | いちほくいっそう | 六 | うすべら | 一〇 | おあいかわ | 一六 |
| あとかたづけ | 七 | いちもくさん(に) | 二 | うすよこれた(うすよ | 一〇 | おあめ | 一四 |
| あびせかける | 三 | いちりゅう | 二 | これる) | 六 | おあう | 一六 |
| アブラハム・リンカーン | 一 | いっけん | 三 | うたぐる | 三 | おあう | 一七 |
| あやまち | 一六 | いっそ(のこと) | 一 | うちかたて(うちかつ) | 二 | おおかた | 三 |
| あらっばい | 六 | いっそく | 一〇 | うちゅう | 三 | おおさか | 九 |
| あり | 五 | いったい(ぜんたい) | 一〇 | うっすり(と) | 三 | おおちがい | 二〇 |
| ありがち(な) | 二五 | いったい | 七 | うるし | 七 | おおつぶ | 三 |
| ありのまま | 三〇 | いつわって(いつわる) | 六 | ○えいほい | 五 | おおむかし | 一六 |
| あれち | 三 | いどうてんらんかい | 九 | えいゆう | 三 | おおむらよしこ(さん) | 一六 |

| | | | | | | | |
|---------------|-----|--------------|----|---------------|----|--------------|----|
| おかた(かた) | 一〇六 | およそ | 二六 | かして(かす) | 一八 | かりました(かる) | 一八 |
| おかべへいた | 三 | オリンピッククたいかい | 二四 | かじりつく | 二 | かりあと | 一六 |
| おがわ | 三 | ○がいくすもう | 二六 | かた | 二 | かわき(かわく) | 九 |
| おきて | 七 | かがいしく(かいが | 二 | かたあし | 一〇 | かわぎし | 一〇 |
| おくぶから | 二五 | いしい) | 三 | ガタガタ | 一五 | かわごし | 一〇 |
| おさめなり(おさめる) | 九 | かいぎ | 二 | かたまり | 一〇 | かわばた | 二 |
| おじか | 一五 | かいけいぶ | 六 | かち | 一〇 | かわむき | 二 |
| おしかけて(おしかける) | 五 | かいじょう | 六 | かちのこった(かちのこる) | 七 | かわむらてるお | 一 |
| おしまい(しまい) | 六 | かいたく | 三 | がくきゅうえん | 一〇 | かんせい | 一三 |
| おしよせて(おしよせる) | 九 | かいちょう | 六 | かつぐ | 一〇 | かんとう | 三 |
| おそろしさ | 八 | かいほう | 五 | がっしりこく | 二 | ○キイキイ | 一〇 |
| おそわれます(おそわれる) | 二 | かいほう | 二 | がっしり | 二 | きかい | 一〇 |
| おだわら | 一〇 | がいろじゆ | 二 | がって | 二 | きかえて(きかえる) | 一〇 |
| おとっつあん | 一〇 | かえ | 一三 | かつどう | 一〇 | きく | 一〇 |
| おとも(とも) | 一〇 | かか | 一〇 | かなた | 一〇 | きげん | 一〇 |
| おとらぬ(おとる) | 一〇 | かかと | 一〇 | かなや | 一〇 | きこう | 一〇 |
| おのすから | 一〇 | かがみ | 一〇 | かのほ | 一〇 | きしょう | 一〇 |
| おはか(はか) | 一〇 | かがめながら(かがめる) | 一〇 | かふう | 一〇 | きせつふう | 一〇 |
| おはらめ | 一〇 | かきね | 一〇 | かみがた | 一〇 | きぞく | 一〇 |
| おもいなしか | 一〇 | かく | 一〇 | かもうわづつみ | 一〇 | きそどうちゅう | 一〇 |
| おもしろみ | 一〇 | かくち | 一〇 | かゆい | 一〇 | きたぐに | 一〇 |
| おもんぜられる(おも | 一〇 | かこい(かこう) | 一〇 | ガラスど | 一〇 | きたはち | 一〇 |
| んずる) | 一〇 | かこかき | 一〇 | ガラスばり | 一〇 | きづかなかった(きづく) | 一〇 |
| おやかた | 一〇 | かざみ | 一〇 | カラフト | 一〇 | | |
| おやこ | 一〇 | かじつ | 一〇 | | | | |

| | | | | | | | |
|------------|----|---------------|-----|---------------|----|------------|----|
| ぜんしん | 完 | たいりよく | 三 | ちやめ | 二 | ていしゃじょう | 英 |
| ぜんそん | 完 | たくましい | 三 | チューブ | 七 | でいりぐち | 三 |
| ぞうりとり | 六 | たけやぶ | 三 | ちゆう(もの) | 六 | できごと | 四 |
| ぞうきばやし | 一〇 | たすけぶね | 一五 | ちゆうし | 三 | でぐち | 古 |
| ぞうしゃ | 三 | たそがれ | 七 | ちゆうきもく | 三 | てくてく | 古 |
| そろう | 二 | たたえながら(たたえる) | 二五 | ちゆうきより | 三 | てさぐり | 三 |
| そこいた | 六 | たたきこんで(たたきこむ) | 七 | ちゆうさく(くん) | 六 | てつ | 一〇 |
| そこしれない | 一〇 | たちまち | 六 | ちゆうし | 六 | テニス | 六 |
| そしき | 三 | たてふだ | 五 | ちゆうちん | 六 | てほん | 一〇 |
| ソビエツト | 盟 | たなびき(たなびく) | 七 | ちりのこり(ちりのこる) | 六 | てまえ | 三 |
| そまりそう(そまる) | 三 | たばこぼん | 一〇〇 | つかつか(と) | 一六 | てらまち | 一七 |
| そんけい | 四 | たびびと | 一〇 | つきあつて(つきあう) | 二七 | でんきかけ | 一〇 |
| 〇—だい | 二 | たもと | 一六 | つきやぶつて(つきやぶる) | 七 | でんじかい | 七 |
| だいかくめい | 三 | たより | 六 | つぐみ | 八 | でんしゃ | 八 |
| だいく(さん) | 二 | たる | 六 | つけもの | 六 | でんじょう | 七 |
| だいせいじか | 三 | たんば(のくに) | 七 | つげり(づく) | 六 | でんしんばしら | 七 |
| だいせつせん | 二 | たんぼみち | 八 | つづた(つづる) | 六 | 〇トーマス | 二 |
| だいたりょう | 二 | たんざわ | 三 | つのみ | 三 | といて(とく) | 二 |
| たむらいちろう | 八 | だんこうきょうそう | 四 | つまさき | 一五 | とうかいどうごじゅう | 二 |
| だいひょう | 一〇 | だんたいきょうそう | 四 | つもつて(つもる) | 七 | さんつき | 七 |
| タイム | 七 | 〇ちかいました(ちかう) | 四 | つやつや(した) | 六 | とうかいどうちゅう | 七 |
| だいやがわ | 八 | ちかごろ | 三 | つりあい | 二 | とうぜん | 七 |
| たいようせん | 言 | ちちぶ | 三 | つるつる(の) | 七 | どうちやく | 七 |
| | | ちっぼけな | 三 | 〇テープ | 七 | どうどろ(と) | 七 |
| | | ちやいろ | 九 | てあし | 三 | とうほく | 七 |
| | | ちやかつしよく | 八 | | | | |

| | | | | | | | |
|--------------|----|--------------|----|---------------|----|---------------|----|
| とおりがかり(の) | 四 | なつかしい | 九 | のうはんき | 五 | はなさき | 一〇 |
| ときおり | 八 | なにぶん | 四 | のこざり | 五 | パノラマ | 七 |
| ときふせる | 四 | なべ | 一〇 | のこらす | 三 | はば | 三〇 |
| ときれ(がち) | 三 | なまいき | 一〇 | のぞかせ(のぞく) | 五 | はもん | 三 |
| とこや(さん) | 三 | なや | 一〇 | のわき | 五 | はやして(はやす) | 三 |
| としより | 六 | ナンシー | 二 | 〇はいく | 九 | はやしふさこ(さん) | 四 |
| トタン | 三 | なんちよう | 三 | はいぶつりよう | 九 | はらつて(はらう) | 四 |
| どつと | 二 | なんとうふう | 三 | はえ | 三 | はらっぱ | 七 |
| どて | 四 | なんもんだい | 三 | はおと | 四 | はり(がある) | 一〇 |
| とどまらず(とどまる) | 五 | 〇ニユース | 盟 | はかどりません(はかどる) | 二 | はりきつた(はりきる) | 八 |
| とびり | 三 | ニユース | 〇 | ばかばかしい | 一〇 | はりつめて(はりつめる) | 三 |
| とぶん(と) | 一四 | にゅうがく | 〇 | はきながら(はく) | 九 | パリンパリン | 三 |
| とみに | 六 | にんぎょうしばい | 七 | はぎれ | 三 | パルチックかい | 三 |
| ともしび | 一 | にんぶ | 一〇 | はぐさ | 六 | パレット | 九 |
| トラック | 三 | 〇ぬつて(ぬう) | 三 | はこ | 八 | ばんこつき | 三 |
| とりいれ | 三 | ぬりつけた(ぬりつける) | 七 | はこねやま | 三 | ばんざい | 七 |
| とりかかります(とり | 三 | ぬるで | 七 | はこねやま | 三 | ばんゆういんりよく | 七 |
| かか) | 三 | ぬる | 七 | はさみばこ | 一〇 | 〇P・T・A | 七 |
| とりのけて(とりのける) | 二 | ヌルミ | 〇 | はしご | 一三 | ひいでた(ひいでる) | 一〇 |
| とりのこされた(とり | 二 | 〇ねがつて(ねがう) | 盟 | はだえ | 六 | ひかえ | 三 |
| のこす) | 三 | ねだん | 二 | はたさお | 五 | ひきしまった(ひきしまる) | 二 |
| ドルキース | 元 | ねっせん | 三 | はだぬぎ | 五 | ひきのこる | 六 |
| どれい | 二 | ねっちゅう | 三 | パツ(と) | 四 | ひくく(ひくい) | 六 |
| とんでもない | 一〇 | ねどこ | 三 | はつせ | 元 | ひける | 五 |
| とんや | 一〇 | ねゆき | 八 | はつたけ | 六 | ひざくりげ | 七 |
| 〇なかは | 九 | 〇のうえん | 七 | はつびょうかい | 八 | ひざまずいて(ひざまずく) | 一〇 |

| | | | | | | | |
|-------------|-----|-------------|-----|---------|----|---------------|----|
| ピタ | 二九 | ふた | 一〇三 | べつじょう | 一五 | まがって(まがる) | 一一 |
| ひたって(ひたる) | 一〇四 | ふちゅう | 九 | べつびん | 八 | まけろ(まける) | 一〇 |
| ひつし | 二九 | ぶっさん | 八七 | へて(へる) | 九 | まさり | 七 |
| ひつしゅり | 九 | ふと | 七 | ベルギー | 三 | まじゅつ | 九一 |
| ひとさしゆび | 九 | ふところ | 七 | ヘルシンキ | 三 | ますます | 五 |
| ひとすじ | 六 | ふとった(ふとる) | 一六 | べんごし | 三 | まつばやし | 四 |
| ひととおり | 一五 | ふべん | 七 | べんしょう | 二〇 | まにあわない(まにあう) | 二四 |
| ひとふゆ | 六 | ふみしめ(ふみしめる) | 四 | 〇ぼうか | 九 | まねかれて(まねく) | 三 |
| ひのき | 六 | ふゆじたく | 三 | ほうこう | 六 | まみれた(まみれる) | 三 |
| ひのみやぐら | 三 | ブラタナス | 三 | ほうこくかい | 九 | マラリヤねつ | 三 |
| ひぶん | 三 | ふるれば(ふれる) | 六 | ほうさく | 八 | まるた | 三 |
| ひやひや | 二二 | ふるいたたせず(ふる | 四 | ほうせんか | 六 | まるやまおうきよ | 一〇 |
| びゅうびゅう | 九 | いたつ) | 四 | ほうそく | 二〇 | 〇みえて(みえる) | 一〇 |
| ひょい | 三 | ふれあつて(ふれあう) | 九 | ほうや | 二〇 | みかけます(みかける) | 六 |
| ひょうじょう | 二七 | ふるおけ | 二 | ほおほね | 二七 | みさっしゅい | 二 |
| ひょうばん | 二五 | ふるば | 三 | ほくせいふろ | 二 | みじんも | 二 |
| ひらめいて(ひらめく) | 三 | ぶんがく | 一〇 | ほくほく | 七 | みぞ | 三 |
| ひりひり | 一〇 | ぶんかしつ | 九 | ほくりく | 七 | みぞれ | 二 |
| びん | 九 | ぶんかぶ | 六 | ほこりげ | 三 | みだれて(みだれる) | 五 |
| ひんびょうかい | 九 | ぶんこ | 四 | ほっかいどう | 三 | みちすがら | 九 |
| 〇フィンランド | 二四 | ぶんしゅう | 九 | ほっかり(と) | 三 | みつめて(みつめる) | 七 |
| ふきいで(ふきだす) | 三 | 〇へい | 八 | ほんみょう | 九 | みども | 三 |
| ふく | 三 | へいせい | 三 | 〇—まい | 九 | みなおす | 一〇 |
| ふっかいちょう | 六 | へいわ | 六 | まいた(まく) | 一〇 | みなぎりました(みなぎる) | 一〇 |
| ふさ | 八 | べからず | 五 | | 四 | みなとまち | 三 |

| | | | | | | | |
|---------------|----|--------------|----|--------|----|---------------|----|
| みね | 六 | もえて(もえる) | 九 | 〇ゆうかせ | 七 | れんぎ | 一三 |
| みのりかけた(みのる) | 八 | もくせい | 三 | ゆうぎ | 四 | れんざん | 八 |
| みまわす | 一〇 | もてあまし(もてあます) | 二九 | ゆうぐれ | 一〇 | れんぞく | 八 |
| みやじま | 九 | もどつて(もどる) | 六 | ゆうじょう | 三 | れんたいわたし | 一〇 |
| みわけ | 八 | ものおと | 六 | ゆうやけぐも | 七 | 〇ロビンソン・クルーソー | 一〇 |
| みんしゅしゅぎ | 二 | ものごと | 九 | ゆうやみ | 一 | ロミグ | 九 |
| 〇むくどり | 四 | ものみだかい | 七 | ゆえ | 二 | 〇わい | 三 |
| むこうはちまき | 五 | もん | 一七 | ゆきがこい | 八 | わかがえつた(わかがえる) | 六 |
| むさしの | 三 | 〇やあれやれ | 一七 | ゆったり | 二 | わきました(わく) | 一〇 |
| むすこ | 三 | やかましい | 一三 | 〇ようこう | 七 | わきざし | 一〇 |
| むらたせんせい | 九 | やじきた | 三 | ようやく | 二 | わざわさ | 一〇 |
| むらたみのる | 九 | やじろう | 三 | よしがき | 六 | わしら | 一〇 |
| むれ | 五 | やすみじかん | 九 | よしきた | 一〇 | ワントンンでん | 一〇 |
| 〇め | 一七 | やど | 九 | よせん | 一〇 | わたいれ | 一〇 |
| めいぶつ | 八 | やど | 九 | よねん | 二 | わたしちん | 一〇 |
| めぐまれた(めぐまれる) | 三 | やど | 九 | よみもの | 七 | わかる(わかる) | 六 |
| めぐらされ(めぐらす) | 三 | やどや | 一〇 | 〇りくじょう | 七 | | |
| めざす | 二 | やとわれたり(やとう) | 一六 | りそう | 六 | | |
| めしあがつて(めしあがる) | 八 | やまかけ | 六 | リトラ | 九 | | |
| めだま | 七 | やまかや | 六 | りょうきち | 九 | | |
| めった(に) | 九 | やまぞら | 六 | りょうけん | 三 | | |
| めんじて | 七 | やまつづき | 六 | リンカーン | 三 | | |
| めんぼく | 二 | やりそこなつた(やり | 二 | りんかく | 二 | | |
| 〇モーターボート | 八 | そこなう) | 二 | 〇れいき | 二 | | |
| もうしでなさい(もう | 八 | やりもち | 二 | レスリング | 二 | | |
| しでる) | 一五 | やろな | 二 | | 二 | | |

文庫

50

747

広島大学図書

0130449747



おことわり

本書の用紙は来年度使用教科書からより良質のもの（新教科書用紙）を使用することになつて居ります。